2008 年度ジェンダーフォーラム設立 10 周年記念公開講演会

［2008 年 7 月 3 日（木）、立教大学池袋キャンパス 8 号館 8101 教室、18：30 － 20：30］

『ジェンダー研究のこれまでとこれから』

講師：江原 由美子氏（首都大学東京大学院人文科学研究科教授）

近藤：皆さんこんばんは。私、立教大学ジェンダーフォーラムの所長をしている近藤と申します。よろしくお願いいたします。

立教大学のジェンダーフォーラムは 1998 年の 4 月に設立されまして、今年でちょうど 10 周年を迎えることになりました。そこで、毎年、公開講演会は開催しているんですけれども、今回は設立 10 周年の記念公開講演会ということで、この講演会を企画させていただきました。

そして、それを契機にしてこれまでのジェンダー研究、それから、これからのジェンダー研究ということについてぜひお話をしていただこうということで、講師として今日は江原由美子先生、ジェンダー研究の第一人者でもあられますし、こうしたテーマに対しては一番ふさわしい先生ではないかと思って、お忙しい中をお願いいたしましたところ、本当にご快諾をいただきまして、改めてお礼を申し上げたいと思います。

江原先生については皆さん、充分ご存じだと思いますので、特にご紹介等は省かせていただきますけれども、これからさっそく先生のお話と、また後で若干質疑の時間を設けたいと思いますので、もし何か皆さんの方でお尋ねになりたいことがありましたら、先生の方にお尋ねいただければというふうに思います。

それではさっそく、講演の方を始めさせていただきます。先生、よろしくお願いします。

江原：皆さん、こんにちは。ちょっと風邪をひいておりまして、夏風邪で、２週間ほど前に関東社会学会というのが我が大学であったんですが、その日に鼻風邪をひきまして、もう治ったかなあと思ったらまたぶり返しました。なんか結構長いようでございます。おそらくこのことを皆さんもちゃんとわかっていて、近くによるのを避けて下さっている（笑）。普段なら、もっとそばに来てくださいって言うのですが、今日はちょっと離れていただいほうがよろしいかもしれません。お聞き苦しい点があるかもしれません。申し訳ございませんが、その点、よろしくお願いいたします。

10 周年。ジェンダーフォーラム設立 10 周年記念講演会だそうで、そんな晴れがましい場所に呼んでいただいて、本当にありがとうございます。そんなところに来ちゃっていいのかなっていう思いもあります。こちらは 10 周年だそうですが、私自身がジェンダー研究（今、そう言われているような領域）に足を突っ込み始めましてからは、…そうですね、25 ～ 6 年経ってますでしょうかねえ。なのでまあ、私も相当古い。だからまあ「古いことを知っている」という意味で来ても良いかなと。年の功だけですね。

皆さんのお手元に、レジュメ（レジメでないですね、文章そのものになっていますね）が、あると思います。これが「ジェンダー研究のこれまで」なんです。ジェンダー研究が 1970 年代から今日まで、どのような歩みをしてきたかという私なりのまとめになっています。これをまずやります。そのあと本日の講演は「これまでとこれから」ですから、「これから」の方を口頭で発表させていただきます。「これから」の方も本当はレジュメを切ればよかったのですが、そうなってなくて申し訳ありません。そん

なふうにさせていただければと思います。大体、１時間半ぐらいをめどに話させていただいて、30 分程度の質疑応答というふうに考えております。よろしくお願いいたします。声の方よろしいでしょうか。後ろまで聞こえてますでしょうか、大丈夫ですか？はい。ありがとうございます。それでは、始めさせていただきます。

「ジェンダー研究のこれまで」というレジュメですが、実のところ、これは本日のために準備したものではなくて（ほんと申し訳ないですねぇ）、今年の３月に日仏会館で『ボーボヴォワール生誕 100 年祭』というのがありまして、その時使わせていただいたものなのです。そこでも本日と同じ、「ジェンダー研究のこれまで」という主題で話すことを依頼されたわけです。ところがその場は、フランス語と日本語の二ヶ国語が使用言語なのですが、私はフランス語はできない。つまり日本人の通訳の方に依頼してフランス人向けにフランス語に訳していただくわけです。でもその場で同時通訳ということはできないので予め全部原稿化してくれと言われて、話すことを全て文章化したのですね。普通私は講演会のときにはレジュメの形でしか資料を出さないのですが、今回はそんな理由で、こんな文章体になっているんです。そちらのほうで、「もしかしたら日本人の方にこの文章をそのまま印刷して配布されるのかなあ」と思っていたら、そんなことは全くなくて、通訳の方にしか文章は渡らなかった。私は単に日本語で口頭報告しただけでした。なので実際にはこの文章は、本日が初出みたいなものなので、「まあいいか、使っちゃえ」ということで、こちらに使用させていただきました。すみません。なんとも図々しいことになってしまいました。でもそちらの会ではこの文章をフランス語訳し来年の３月に出されるそうですが、日本語訳の方はそのまま印刷されるということは聞いておりませんので、こちらの方にレジュメとして使用させていただく分には差し支えないのではと、思っております。

そこで、レジュメに戻りますが、こういうタイトルで話させられたものですから、最初のあたりですね、これまでの自分が書いてきたことを振り返り、かなり詠嘆調の文章になっています。ちょっとレジュメの文章の一番最後の文献リストを見てください。『女性解放という思想』（勁草書房、1985）以降の私の文献が、幾つか挙げてあります。つまり、私は、これまで 25 ～ 6 年の間に、その時その時に、「ジェンダー研究のこれまで」とか、「女性学のこれまで」等の同じような文章を、何度も書いているんですね。それらを集めて振り返りまして、その時その時にどんなことを考えていたのかなあ、というのを思い出しながら、この文章を書いたわけです。本日のお話の種本は、それでして、そこの文献リストに挙げた複数の私の論文の文章を、つなげただけということです（またしても申し訳ございません）。その意味で新鮮味が全然ない話ではあるんですが、でも、つなげてみるとおもろいかなあという気もしますので、お聞きいただけるとうれしいです。

文章のはじめに「18 年前」私は今と同じ問いの前に立っていたと書いてありますが、それは文献リストで言いますと、1990 年に論文にした「フェミズムの 70 年代と 80 年代」というものを書いたときのことです。この論文は、『フェミニズム論争』（勁草書房）という本の中の解説文として書いたものです。そこの中で私は、現在と同じように、「ジェンダー研究はこれまでどんなふうに動いてきたのかなあ」と、考えていたわけです。実は 18 年前には、「ジェンダー研究」という言葉はまだない。なので、その時は、「女性問題・女性解放論・女性史」という領域三つを、中黒で並べて、こういう領域はどのように展開してきたのだろうかと、その時自分で問うていた。もちろん「ジェンダー研究」は、女性問題･女性解放論･

女性史と、やや違う。たとえば「ジェンダー研究」には男性学も入ってたりしていて、ちょっと範囲が広い。でもまあ、大体同じような領域だといえると思うのです。なので、女性学やジェンダー研究というものがどのように展開してきたのかなあということを、18年前のその時も、今と全く同じように振り返っていたと言っても良いように思います。で、その時の回顧の文章は、「断絶か継承か」っていう節から、書き始められてたんですね。つまりその時私は「これから上手く未来につながっていくのかなあ、不安だなあ、どうなっていくんだろう」という思いを持っていた。そういう思いを込めて「断絶か継承か」というタイトルで書き始めたのです。

その当時ですね、非常に多くの「女性学・ジェンダー研究」があったんですが（つまり今で言うところの「女性学、ジェンダー研究」、当時は、女性問題･女性解放論･女性史というような領域のことです）、次から次へとものすごい勢いで新しい研究や著作がなされていたのですが、他方それらの諸研究の担い手の交代というのが著しく激しかった。本当に「次から次へ」と交代するような形だった。なので「このままつながっていくのか」ということがよく見えない。なんかそんな時代だったんですね。嬉しいことに、その時の不安は、単に杞憂に過ぎず、今に至るまでちゃんとつながり、この研究所も10周年を迎えたわけです。

ではその時の不安は単に杞憂だったのだから、今はもうそんな心配をしなくて良いのかというと、つまり今私は、とても安心して「今後もつながっていくだろう」と「まあなんとか上手くいくだろう」と思っていられるかっていうと、どうもそうでもない。それが「始めに」というところの主題でございます。

やっぱり、今これまでを振り返り、これからを考えると、「確かにこれまでは継承されてきたけど、今後どうなるのだろう」という不安感を拭い去ることはできない。不安がより一層強くなっているような気がします。「果たしてこの先、女性学･ジェンダー研究は、どのように引き継がれていくんだろうか？いや、そもそも引き継がれていくのだろうか？」。そういう問いが、ほんとうに身にひしひしと迫るほどですね、強くなっている。

ここにお集まりの方々は恐らく関心のおありのある方ですから、今後の「女性学･ジェンダー研究」を、率いて下さる、引っ張っていって下さる方だというふうに思っています。ただ、それは楽に継承できるような道ではない。下手をすればあっという間に雲散霧消ということもありうる。実際私たちは、そういう「薄氷を踏む思い」と言ってよいような不安な経験を、この数年してきたわけです。つまり、ジェンダー･フリー･バッシングなどといわれるような政治的な状況や、全体の政治保守化過程の中での「フェミニズム」離れなど、政治的な要因が大きいですが、それ以外のいろんな要因も関与していると思いますが、「ジェンダー研究」は、それを否定するような動きから、この数年、かなり痛手を負ってきました。我々は大きな痛手を被ったと思います。「女性学・ジェンダー研究」の領域の人々は、相当大きな痛手をこの数年、2000年以降受けてきた。

今後、学生さんたちに、若い院生の方々に、若手研究者のこれから研究しようとする人たちに、一体ジェンダー研究は引き継がれていくのだろうか？それはとっても不安ですね。時々院生の方が「ジェンダー研究なんかやめた方かいいよ」っていうような言い方をしているのも聞きますものね（笑）。「そういう主題やっていると、就職難しいよ」とかね。「ジェンダー研究って、何か恐そうじゃない？やめたら」とか。あるいは、もっと別な言い方では、次のような言い方、「もうジェンダーは重要なポイントじゃないんじゃないか」というような言い方もある。それについては後で後半に話しますが、「今重要なのは非正規労働の話とか貧困の話とか階級の話でしょ？性差別っていう切り口じゃないんじゃない？」等。そういうことがよく聞こえてきますよね。また実践の場に行きますとね、「やっぱり、ジェンダーとか言ってしまっ

て、男女で対立してしまうような論点を表に出すのは今ちょっとまずいんじゃない？対立ではなく一体化できるような主張にしていかないと」等々。

こういう意見、それぞれなかなか良いところをついていて、納得することも多いのですが、では「ジェンダー研究を引き継がないでいいの？」というと、そうではないのではないかと、思うわけです。「性差別がなくなって、全くそんな問題がないのであれば、貧困の問題を考えればよい」のだけど、そうなっていないと思うのです。そうではなくて「性差別の問題が引き継がれながら、むしろ、それを利用する形で貧困の問題が非常に大きくなってきている」ように思うわけで、だとすれば、「今後この問題にどう対処するのか？」というまさにその時に、ジェンダー研究が必要になってくるのではないかと思うわけです。

話を元に戻します。私は、なんか、いつのまにかジェンダー研究が、この十年の痛手の中で、次第に非常に「防衛的」になってきてしまったのではないかと感じてます。研究の目的というか、ジェンダー平等をどのようにして実現していくか、そのために社会をどのように引っ張っていくかというような姿勢を失って、なんか一歩引いている。「単にたまたま研究対象がジェンダーに関連した社会現象だから研究しているだけ」とか、「自分の研究対象はたまたまそれだから」とか、「自分以外の分野には関心がない」とか、ガードを固めることばかりやってて、先がない。

でも果たして本当にこれで大丈夫なのか？実際今は、非常に大きな変動期であるわけです。社会主義崩壊から市場原理主義の台頭、グローバル化と格差社会化、ネオリベラリズムとネオコンサヴァティズムの連携など、ものすごく大変なことがどんどん起きている。だから多くの人たちは、誰が何を言うのかと、私たちをじぃーっと見つめていると思うんです。あらゆる学問が、じーっと、見つめられていると思うんです。このひどいものすごく残酷な社会変動をどう見るのか、そこから何を言っていくのかということが、真剣に試されている。我々が見られているんですね。「どんな答えを出してくれるの？何をしてくれるの？」っていうことですよね。なのに、防衛的なジェンダー研究では、そうした試練を乗り越えることができるのでしょうか？確かにちょっと状況は悪かった。政治的痛手が大きすぎた。そういう気もします。でも試練に立ち向かわなければ、ジェンダー研究は消えいくだけではないでしょうか。

なので、今日はこれから「元気を出す」会にしたい。ここで皆さんと一緒に、ジェンダー研究を昔から振り返る。なるべく客観的に、つまり自己卑下にも自己陶酔にもなるべくならないように、振り返る。ここ数年の痛手というのも、それなりに位置づけて、そこから新たな出発をする準備をする。それで、「次の時代に、引っ張っていく」という話をしたい。10年目らしくていいでしょう？（笑）。あんまり暗い話ばかりして、「バックラッシュで、もう政治的状況がひどくて、先がない」っていう話ばかりではつまらないので、もうちょっとですね、明るい話までつなげてみたいというのが狙いでございます。

私は今必要とされているのは、こうした時代的「見当識」のような話だと思うのですね。時々講演会などでそういう話をしますと、皆食いついてくる。皆今はどんな時代なのかということを、本当にむさぼるようにつかみたがっている。今、やっぱり日本人は、相当「見当識」を失っていると思います。先が見えない。見えてない。今後どうなるかわかんないという不安感がある。だからそれを利用される形で、いろんな変な、信じられないようなことまで起きたんです、この十年。なので、もうそろそろやめたい。そろそろ、私たちは先を見ましょう。先に行きましょう。どんな方向に我々は行きたいのかっていうことを、希望を持って語る必要がある。そういうことをしないわけにはいかない。ジェンダー研究はそれができる。できるだけの力がある、蓄積がある。そういうふうに思いたいと思っています（今のは、少

し希望的観測がすぎましたね。ちょっと甘かったかね（笑）。そんなの無理と言われればそのとおりと、反省します）。

戻りますと、「女性学・ジェンダー研究は本当に引き継がれていくんだろうか？」ということですが、私は今バックラッシュの山は一山越えたかなという気分でいるんですね。無論、バックラッシュその他の政治的状況や、そういうものは、…。まあ日本だけが原因じゃないからね。ブッシュ政権とかですね、キリスト教原理主義とかね、いろんな問題が絡み、グローバリゼーションとか保守化というのが起きてきているわけですが、今はもうそれも終わりに近いのではと思っているんですよ。「このまま行ってはどうしようもない」っていう声が、世界中で大きくなっていることは確か。なので、我々も、政治的な問題を、単に、安倍晋三さんのイデオロギーとか、安倍晋三さんが入っている宗教の一派の問題とか、そういう問題で考えるのではなくてですね、もっと別な面で見たいと思っている。そのために、振り返りたいと思っている。

なぜバックラッシュが起きたのかということは、無論いろいろあるわけですが、そもそもの原因をもっとも根本的に客観的に考えてみれば、私たちが驚異的な成功を納めたからです。だからこそ、これだけ叩かれたわけです。振り返ることで、私たちは、こうしたことをきちんと見ることができると思うんです。

考えてみますと、私、ここまでいくと実は思ってなかった、ほんとの話。うん、自分で言うのもなんですけど。私は、ジェンダー研究、本当に勝手にやってきたわけですものね。何しろ、学部の時、私は、「女性学、・ジェンダー研究」に連なるような授業を一回も受けてません。大学の授業にはありませんでした。なんにもなかったです。はい。で、富永健一さんは（私学問的には、出自は社会学なんですよ）、富永健一先生は、授業の中で、「性別役割分業、つまり男は仕事、女は家庭というのは、家族の非常に美しい協力のあり方であって、近代社会の理想的姿だ」と（そう言いましたよ、本当に、理想的な美しい協力のあり方だと。で、誰も笑わなかったですよ、その時）。それこそ、役割分担の理想的な姿であり、近代の精髄であると。これこそ、このような役割の協働のあり方こそが本当の協働のあり方であるというような授業を受けたわけです。本当にそういうふうに習ったんですから。

腹立ちましたね～（いや～リブなんてやってたもんですからね）。ちょっと「女性の立場からすると異論あり」とか言って、反論したかった。当時も、「仕事と家庭の両立」なんて難しくてとても無理。一生懸命大学教育を受けて、この仕事をしたいと思っても、結婚して子供を持ったとたんに絶対に不可能。で、男性は全然関係なさそうな顔をしてあっちを向いているわけでしょう。それじゃあ一人で生きていけるかっていうと、女性の職業そのものだって、そんなにない状況だったわけで、とても難しかったわけです。70 年代には、女性だけ「25 歳定年制」があったんだから。知ってる？学生さん知らないでしょう？その頃は、ちゃんとね、従業員規則に書いてあったの。「女性は 25 歳を持って定年、男性は 55 歳をもって定年」って書いてあったんだよ。知ってた？あるいは、女性は結婚したら退職（結婚退職制）って、書いてあったわけです。それで女性たちが裁判闘争をやって、高裁で勝訴したのが、1974 年です。それでやっと「やっぱりそれはまずいでしょう」ということになったので、従業員規則は平等になったんですが、会社としてはやはり女性には 25 歳くらいで辞めてもらいたい。それで、しようがない、「居づらい雰囲気」をつくるようにしたんですね。つまり後で年上の先輩女性を「お局さん」とかいろいろ言って、なんか居づらいような雰囲気にさせるようなこと、ありましたよね。あるいは「結婚しても働いている女性」たちをちょっと居づらいという気持ちにさせるようないろんな嫌がらせが生まれたわけです、こうした嫌がらせ自体は勿論インフォーマル。だけどもともとは、25 歳以上、あるいは結婚後の女性の退職は、フォーマルに決まってたわけ。すごいでしょう、70 年代までの性差別って。

凄まじいでしょう？

そういうのを授業で話しするでしょう、そうすると学生さんがいろいろ言うんですよ（授業の話をするとおもしろくて、何時間も過ぎちゃうので気をつけないと）。学生さんが「先生、すごい野蛮」とか言う（笑）。「本当にそんな野蛮なことをやってたんですか」って。そうですよね。本当に「野蛮」！

実は今だって「野蛮」でしょ？どうしてわかんないんのって言いたくなりますよね。本当にこんな野蛮な国、どこにあるかって。ちゃんと見なさいって！見えてないだけだよね？今は少しずつ見えてきたから、みんな、この国がいかに「野蛮」か見えるでしょう。「貧困の問題」とか「母子家庭の問題」とか、「野蛮」とかしか言い様がないでしょう？なんで時給が800円とか850円で、2000時間働いても年収160万から170万なの？「野蛮」でしょうこれ！ どう考えたって「野蛮」だよね。だから貧困になっちゃうんでしょう。だから「野蛮」なことは、きちんと見れば大抵いつもある。その当時も、今も。でも、その当時は、誰も「野蛮」だとは思わなかった。その後女性たちがどんなふうに仕事を辞めさせられても、やっぱり「野蛮だ」と思わないのと同じ。「自分で選んだんだから」「女が家庭を守るのは当たり前でしょう」「子供を産んで母親が育てないなんて許せない！」…今だって言われるよ。ほんとそういうことが次から次に起こるんですよね。なので、結果として罠にはまっちゃった人にとっては、こんな恐ろしい国はない。そういう国なんですね、この国はね。でもそれが見えない人々にはこんないい国はないかもしれない。そこが難しい。

つまり、一方に見えていることが、他方には見えてない。コミュニケーションが難しい。「性別役割分業」って、確かに見方によっては、一方でとっても美しいですね…。富永健一先生が美しい協力のあり方だよって…。確かに。まったく問題ない（つまり夫が死にもしないし離婚もしない、浮気もしない。ちゃんとお金を持ってきて、ただひたすら愛してくれて、家事育児を充分手伝ってくれる、そういう）夫をお持ちの方には、そしてそれで満足っていう方には（自分が仕事をしたいとか思わないという前提条件でならば）、結構いいでしょう。「ニコッっ」てしてしまうほど、都合が良い。でもまったく違う条件の人には、まさに「野蛮」としか言いようがない。cruelって言うかな、残酷としかいいようのない（たとえばＤＶ被害のような）ことをも生み出していくわけです。なので、その時私は言いたかったんですね。富永さんに。「ちょっと違うんではないんですか」と。でもその当時は言えないんだよね。だって、これ、パーソンズだもんね。当時のタルコット・パーソンズは偉いんです。当時はね。もう主流派も主流派。タルコット・パーソンズの社会学っていったら、「ははー」ってなもので、もう逆らえない。そこにそう書いてある！。「『核家族と子供の社会化』を読んだかお前？」「はい、読みました…」（笑）。「男と女は違った役割をやらないと家族はうまく行かないんだ、わかったか？」「はい、わかりました…」みたいな。そういう状態が私の大学時代だったんです。

そこから、今です。今私はこんなところで、ジェンダー研究所の10周年記念講演なんて晴れがましいところで、男性の研究者も含めた会衆の方々の前でしゃべっちゃっている。これはやっぱりすさまじい成功でしょう？ね（笑）。そこから出発したんだと思えば、まあ20何年経ってますけど（30年かな。学生時代からだから）、そう思ったら驚異的な成功です。その間に、国際婦人年とか国連婦人の10年とかですね、世界女性会議とかですね、それから男女共同参画社会基本法だ、雇用機会均等法だ、介護保険法だ、育児休業法だか、ＤＶ支援法だとか、よくも厭きもせず、一つ一つ次々と女性たちは作ってきましたよねえ。厭きてもいられなかったんだけどね（笑）、次やっても次やっても次やっても、やっぱり問題が解決しないから、また次から次へとやらざるを得なかった。そう思えば、「よくぞここまで来

たもんだ」ですよ。そういうふうに見ればね、私たちは、成功したんですよ。

なので、成功したから石を投げられたんだよね。どこからか？ 政治のまっただ中から。一番の権力者から睨まれたんだ（笑）。そういうことが起きて、「ええーっ、世の中こういうもんなんだ」っていうのに初めて直面し、自分が甘かったということが身にしみて分かった。なんかうまくこのままいくように思っていた。そんな甘かった自分に気づいて愕然とした。それがこの10年だったと思う。

でも、まあ、よく考えてみればですね、もし私たちがちっちゃければ、向こうも「石を投げる」気すら起きないんですね。「どうでも良い人たち」には投げやしません、向こうもね。つまり投げたくなるほど、大きくなったということなのだと思います。その意味ではこれまでやってきたこと、「ジェンダー研究のこれまでの越し方」は、「結構偉かったじゃない」っていうふうに見ることもできるわけです。その方向で、我々のやってきた道というのを振り返ることもできると思うのです。

先日ＮＨＫＴＶを観てたら、トランスジェンダーの問題を、ＮＨＫの３チャンネルかなんかでやっていたんですね。「ああ、こういう番組をテレビをやるようになったのかな」とかっていう感慨で観てました。そこで海外での取材がビデオで流れていて、自分の生き方について、トルコの方が出てきて（アメリカかどこかに留学をしている人だったと思うのですが）話しているのね。その人の言葉を引用すると、「私たちの国ではトランスジェンダーという生き方を表明して生きることができる状況にはない。日本はすばらしい」なんて言うわけです。「自分で自分の人生を決めるという考え方を貫き、非常にいろんな意味で社会的なプレッシャーがあるにもかかわらず、それを自分の生きたいように生きる、と言えている日本はすごい。自分の国ではできない。トルコではまだ無理だ」っていう話が出てきた。「おお、なんかそう言われる国に日本もなったんだ」って。そういうふうに海外の人から言われるなんてことが起きるとは、正直昔思ってはいませんでしたね。

なぜなら、日本社会は、こんなにジェンダーについての規範が厳しい社会はないと思うほど、ジェンダー規範が強いからです。まだきついんです。それにもかかわらず、海外からそう見えるようになった。これはやっぱりある意味成功であり、それ以外の何ものでもないじゃないですか。そう思うことにしましょう。そうすれば元気も出るから。ということで、ちょっと前の方を振り返りたい。そうすると成功をしたっていうことがリアルに見えると思いますんで、少し丹念に追ってみたいと思います。

以下においては今日に至るおよそ40年間の現代日本における「女性学・ジェンダー研究」の展開を、理論的発展や変容に配慮しつつ五つの時期で論じてみます。

まず、リブ運動期です。時期的には1970年から1977年まで（と、私は昔勝手に決めました。こういう研究をやって下さい。その後誰もやってくれないのだもの！すみません。つい文句言っちゃいますけど）。私は「リブ運動期」、「女性学成立期」、「フェミニズム理論導入期」まで（勝手に）三つに分けて、女性運動や女性学、ジェンダー研究の日本における流れをまとめました。

この時期区分を終えたときに、『ああ、私の役割はもう終わりだ、きっと次の人が次の時代区分を考えてくれるよ』と思ったのに、その後誰もしない（なので私がすることにしました）。こうした時期区分とか、分類とかを研究主題にしてやってください。で、私の分類とか時期区分とかを、どんどん変えてください。こういうこと大事なんだよ！いつも自分たちがやってきたことに戻って、「自分は何をしてきたか」「みんな何をやってきたか」などを、「自分なりの言葉でまとめて次に伝える」。こういうこと非常に大切です。ものすごく大事です！ジェンダー研究以外の人にやられちゃっているだけではダメ！「自分でやる」の！　ね、絶対やっていくの。これで「くり返し、くり返し、くり返しやったこと

をまとめ、研究を先に展開し、またまとめ、先に伝え、また展開し、またまとめ、まとめ返す」。こういうことをやっていく必要がある。こういうことをやらないと、研究が霧散しちゃう。消えちゃう。

すみません。というわけで、私は「勝手に」時期区分してます。何の根拠もないよ（すみません）。みんなはもっといい区分でやってください。そうするといろんな立場が出ておもしろいから。一応、江原流のまとめをすると、「リブ運動期」「女性学成立期」「フェミズム理論導入期」、その後は「女性学からジェンダー研究への変容期」と、それから「バックラッシュへの対応期」という５時期区分になります。それぞれ簡単に見ていきます。

まず「リブ運動期」です。リブ運動というのは最近でもやっぱり人気ありますね。大学院生のテーマなどにもときどきなりますね。やっぱり魅力的なんでしょうね、テキストがね。いろいろ資料もまとめられていますし、昔は田中美津さんの『取り乱しウーマン・リブ論』ぐらいしか、ちゃんと読めるテキストがなかったんだけど、現在は運動体の資料集などがまとめられて、最近もいろいろ出てきている。ああいうのを読むとね、なかなかやはり凄いと思う。やっぱりね、なんて言うんだろう。「血湧き肉躍る」というのかな…（笑）。こんなふうに一生懸命あの時代の女性たちは生きたのかということをきっとね、活字からも伝わってくるんですよ。紙面から。

だからきっと皆さんに、まだ人気があるんだと思うんですね。もう 30 年、40 年ぐらい経っているにもかかわらず、力があるテキストっていうものがもたらすものは、こういうもんなんだなあと、今でも思っています。大体 70 年に、『グループ闘う女』っていうのがリブ運動の旗揚げをした、というふうに言われてます。まあ、これが大体通説です。

もともとリブ運動は、60 年代末の大学紛争や新左翼運動を下敷きにしています。アメリカでもそうだったんですが、そうした運動に参加していた女性たちが、運動の中の性差別問題に気づき、それに対する告発をきっかけとして、日本社会に根深く存在する性差別的社会構造や社会意識への告発、さらには自分自身・女性自身の中にもある性差別意識への自己批判などに問題を広げていきました。その意味でリブ運動は、非常に包括的な主張を含む自己解放運動でした。

「出発点」というところに、いろいろ書いちゃったんですが、大学紛争とか新左翼運動っていうのは、本当に当時の若者には、非常に大きな意味を持つ運動だったんですね。あの頃、いろんな若者たちが運動に参加した。今の団塊の人たちです。もう退職年齢で、だから 2007 年問題になって騒がれているあの団塊の人たち。私も「あと 10 年は地域で頑張れー」って言っているんだけどね、会うたびに。団塊が地域に戻ってくれば、あと 10 年は地域は元気になる。その後？そんなこと知るか（笑）。団塊の人たちがついに地域に帰ってくるっていうんで、地域は結構本気で待ってます。この人たちが仕事を辞めて、地域でいろんな問題提起をしてくれるんじゃないか、と、楽しみにしているんです。何でかというと、彼らは社会運動をやった経験がある。その楽しさを知っている。社会運動の楽しさや、社会がわーって盛り上がる時の雰囲気…。今の若者は本当にそういう経験がない。なぜだろう？団塊のエネルギーは、やはり人口圧力かなあ。何しろ、人口が多いんだもんね。山ほどいるんだもん。だから、きっとあの、ワッショイワッショイの雰囲気で世の中を変えちゃったんだと思うんですが、この人たちが中心になって、そういういろんな運動をしていた。大学紛争だとか新左翼運動だとか、ベ平連の活動だとかね。ベトナム戦争反対とかですね、ヒッピー運動だとか、市民運動だとかですね。文化的なものとか、いろんなものがガチャガチャ、ガチャガチャってあった。

だから学生にとっては、「大学なんかいるべきところじゃない」って感じだった。若い方がいるから、ついこんな昔話しちゃうんですけど。当時は、大学っていうのは入るけど、授業なんかに出るもんじゃ

ないという雰囲気でした。「何をするのか？」って？集会に行ったりね、いろんな運動に行ったりしてですね、社会勉強をするべき場所なんだよね。その当時、先生の話なんて聞いているのっていうのは、一番こう…、何て言うか、要するに何にもすることのない…。でもそういう人たちが後に出世したんだよ、当時大学でガリ勉していた人がね（大学教員になりました。はい、すみません（笑）。でも私はその次の世代だから間違えないでください。私は団塊ではないと一所懸命言っているんですけど、次の世代なので、別に紛争当時ガリ勉をしていたわけではございません。間違えないで下さい、（笑）はい。上野千鶴子さんは団塊だけど、やはりガリ勉してなかったと思うよ。すみません、ガリ勉してない人も大学教員になっています。でもガリ勉してた人もいるんだよね。）なので、結構優秀な社会学研究者の卵も、大学を去りました。「大学には夢も希望もない。必要なのは社会的実践だ」と。そういうことをリアルに感じられるような社会的雰囲気があった、当時はね。つまり当時は、現実の社会運動の中の方に、ラディカルさもおもしろさもあったわけです。その中の一つが、ウーマン・リブだったんです。

どうしてそうした運動が生まれたかというと、さっきもちょっと言いましたが、アメリカでも他の国でも同じですが、運動の中の性差別は凄まじかったからです。こういうことを言うと、「歳がバレる」のですけど、結構私もいろいろ運動を経験してまして、そこでそうした性差別を経験しているわけです。私自身が大学で作っていた女性運動のグループがあって、現在も時々会うこともありますが、友人に竹信三恵子さんがいますが、彼女たちとグループを作っていました。彼女は一昨年たしかここにいらしたはずですよね。朝日新聞の記者、労働問題・女性問題をやっている方。彼女たちと一緒にグループをつくった、大学でね。そのきっかけになったのが、運動をやっている連中のとてつもない鈍感さだったわけです。まあー、私は許せなかったですね。ここではちょっと言葉に出したくないので（あとで知りたい方にはこっそり教えてあげます）言いませんが、運動のスローガンの中に、女性に対する性暴力を正当化するような言葉が使われていたりする。「ひっでぇヤツら」だと思いました。「この人たちをどうにかしなきゃ！」という思いにかられた女性数人で集まったわけです。同じ運動をやっているからこそ、そうした性差別（というか性差別であることにすら気づかない）は許せない、なんでこうなっちゃうのって思う。「一緒に闘おうと思っているのに、それがこういうことになっていくのかなあ。この人たちにとって性暴力ってなんなのかなあ」と。例えばね、当時の左翼の中には、「痴漢は革命だ」とか、そういうような文章だってあったわけです。覚えています？痴漢することっていうのは、犯罪じゃなくて革命なんだって。痴漢行為というのは、「規範を破る」わけですね。だから男性からすると「秩序を壊した！」から「革命」ってことになるのかな。でも、される側からすれば、許しがたい犯罪でしょう。そういう、される側のことを考えてない言動がいっぱいあった。今、性暴力についてはいろいろ問題が明確化されていますけど、そういう問題が全然考えられていなのが当時だったんです。

すみません。おしゃべりしていると時間が経っちゃうので急ぎます。

そういうことがあって、仕事とか恋愛とか結婚とか出産とかセックスとか、そういうこと全てに対する日常感覚自体が、実は性差別の温床なんだっていうことが見えてくる。だからリブ運動が始まったんですね。私自身は71年大学入学ですが、72年ぐらいからウーマン・リブの、東京の、「リブ新宿センター」ですか、そこに出入りするようになっていまして、情報をいただいて一緒にデモに行ったりですね、いろいろいたしました。大学内でもいたしましたし、当時、優生保護法の改悪闘争が非常に大変で、厚生省に座り込みに行ったこともありますし、いろんなことをやりました。

その中でウーマン・リブの問題提起がすごいなと思ったのは、例えば田中美津さんなどは、自ら「ホステスさん」として働いていくわけですね。いわゆる「水商売」と言われる仕事。つまりその当時では、

当時の日本社会では、唯一女性が「食える」仕事だったわけです。それしか実際女性がまともな給料を取れる仕事は、ホントにない。たとえばシングルマザーで、子供がいて、働いて食わそうと思ったら、「水商売」しかない。本当に数少ない選択肢だった。だからこそ、自らそうした仕事に就いていく。それがどういう仕事なのかっていうことを、自ら経験する中で、問題提起していく。当時、「水商売」の女性たちが、どんな性差別に遭っているか、また同性からの差別や、社会全体からの偏見とかに、遭っているかということも、問題提起していきました。

つまりリブは、後に我々が考えなければいけないようになることを、みんな出してくれているんですね。「水商売」の問題は，後の「セックスワーカー論」とかに当たる問題だと思います。今でも大変センシティブな領域です。どう考えればよいのか「正しい答え」が出ているわけじゃない。でもとても重要な問題、まさに今、考え中の問題に連なるような、そういう問題提起が当時すでにあったわけです。

またこうした問題提起は、女性自身にある差別意識をもあぶりだした。自分自身、女性を差別する意識、人を差別したりする意識を持っている。あるいは自分自身、男性と違う女性性に固執する、あるいは母親であるということにとらわれている、そういう、自分の中にある枠を持っている。そういうことを、リブは、私たち一人一人語ってくれたんですね。

時々授業で話したりしているので、またしても同じ話をするのは恐縮なんですが、私が田中美津さんに最初に会ったのは、ベ平連が企画した「広島に行く反戦列車」という企画でなんですね。当時私は大学の１年生で、「学生はやっぱりそういうのに乗って社会勉強しなきゃいけない」と思っていたので、一人で参加しました。そうしたらたまたま、そこにリブの人が来ていたわけです。

なぜかそこで私は、もう一つおもしろい出逢いをしています。五代路子さんにあったんだよ。彼女も横浜から来ていて、演劇をやっていて、私も演劇部だったので話すようになったわけです。彼女は今は新国劇かな。わりと伝統的演劇の方へ行って、今ね、一人芝居でやっていますよね、『横浜マリー』とかね。

広島に着いて、宿屋についた。私はただ小さくなって固くなっていたんですが（ほんとまだ１年生ですから）、田中美津さんたちは、運動をやっている人たちなのでいろんなティーチ・インと称して、主張や宣伝をするわけです。その中で美津さんの登場はやっぱり衝撃的だった。すごかったですね。私がきちんと座ってみなの話を聞いている時に、美津さんはダラーって、寝転んでいるですね。「変な人」って思うでしょう？みんなちゃんとまじめに聞いているんですよ。反戦とか原爆だとか平和だとか、差別だとか、みんな熱くなって話している。ベ平連だって、ベトナムで戦争はこんな行われていて、どうやったら平和をもたらせれるかと話をしているのに、美津さんは、ふてくされているように、寝転んでいるわけです。それで、自分の番になるとですね、「みんなさあ、私寝ててどう思ったあ？」って。「いやな女だと思ってたでしょう？」って（笑）。聞くんですねえ。「女らしくないって。女のくせになんだあの態度は！って思ってなかったあ？」「ほら、あんた、その座り方、ちゃんと足を揃えて座っているでしょう？」って、そういう話。「女性っていうのはどういうふうに対応、からだの形を整えなければいけないか、教わっているでしょう？」って。

まさにそうでした、私なんて。泊りがけの企画に一人で参加したわけですから、身を固くして、「私の身をしっかり守るわ！」とかいう気分で（笑）行きました。間違いがあっちゃいけませんとお母さんも言ってましたし。「一人旅に出すんだからね、お前だから信用するんだよ！」「はい、そのとおりです。私は間違いなど起こす人ではありません」。そう思ってですね、しっかり周りに気をつけて（笑）。そうですね、そういう感じです。「女の子だから、頑張って、一人で肩張って」ね（笑）。

ところが美津さんはまさにそういう私の中の心構えみたいなものを突いてくる。自分自身にある、身

構えている自分の中にある、性暴力へのおそれだとか、ふしだらだなんて思われたくないとか、そういう自分の中にある自分を縛っているものが何なのかを突いてくる。「もう男女平等だとか、女性も男性も違わないとか思っているかもしれないけど、実のところ、既にそこにいる“居かた”そのものが違うんだよ。男を見てみなさい。ちゃんとあぐらかいているでしょう、なのに女はみんな足を揃えて座っているでしょう。何なの、それ」って言うのです。「私がここで一人で寝ていると、なんでそんな変な目で見るの」って。「さっきから見てたんだ私。じろじろ見ている人の目を」って（笑）。まあ、すごい衝撃的でした。まあ、正確に覚えているわけではないので、やや脚色もあるのですが、そんな感じの出来事があって、この人すごい人だなあって感動したのが、美津さんとの出逢いでした。

その後、田中美津さんのところ（「リブ新宿センター」）に行くようになったんですけど、彼女が問題提起していた中には、「からだの動かしかた・化粧のしかた」とか、後に社会学者のＰ．ブルデューが問題にするような、ハビトゥス、ジェンダー・ハビトゥスに関わるような事柄が結構ありました。そういうことが、みんな性差別の問題と結びついているんだよっていう、そういう幅広い問題提起だったわけです。

当時、私は社会学専攻への進学を希望していたんですが、こうしたリブの問題提起は私には非常に面白く、どんどんはまっちゃったわけです。ところが、他方マスメディアでは、リブ運動は、ただひたすら笑い物にされていました。（それで私は後に「からかいの政治学」（『女性解放という思想』所収）なんていう論文を書いたわけです）。ほんとに笑い物にしてしまって、誰も理解しない。「バカな女たちがこんなくだらないことをして、裸になって写真とって、こんなことをやっている。こんなことをやっているような世の中なんだから日本も平和なものだ」というような感じ。あるいは、世界女性会議（メキシコ会議）に女性たちが大挙して出掛けたときに、「世界の女の井戸端会議開催される。うるさい女性たちが大挙してでかけたから、日本も静かになる」なんていう記事が（確か『朝日新聞』か『読売新聞』か、大新聞）に載ったんですね。「女の井戸端会議開かれる」って。それが大新聞が当時行なっていたことです。決して、二流・三流の「悪質な」メディアが書いたわけではない。つまり当時は、女性の問題は、常に「くだらない」問題として扱って良いということが、正当化されていた。要するに、からかいの対象だった。どんな問題でも全部笑い物にしていいんだ、ということだったと考えて良い。真摯に受け止められることは本当に稀だったんです。これが、私たちの出発点です（だから今、首相になるような政治家にまでまじめにとられて反撃されているんですから、すごいじゃないですか）。

でも、メディアはそうでも、しっかりまじめにリブのメッセージを受け取った人はいたんだよね！「どこにいたんでしょうか？女性たちです！（笑）」。確かに多くの女性にではないかもしれない。ごく一部の女性たちに影響を与えたに過ぎないかもしれない。でもそのインパクトは非常に深くおおきかった。私はリブが、日本の第二波フェミニズムの出発点だと思っている。なぜなら、いろんな意味でリブは、ほんとに目の覚めるような運動だったからです。

このリブ運動は、77 年ぐらいまで、いろいろあっち行ったりこっち行ったりしながら続くんですが、次第にやはり続かなくなっていく。このあたりからいよいよ、学問に関わる問題になってきます。つまり、「女性学」誕生です。リブの頃は、女性学もジェンダー研究も一切なしですよ。リブは社会運動なんですね。でも社会運動が次第に下火になっていく頃から、現在ジェンダー研究と言われるような領域につながるような、女性学が生まれてきます。

前に論文に書いたんですが、ウーマン・リブをやっていた人たちと女性学をやった人たちは、人間的

には、ほとんど一致していないんです。研究者で最初からウーマン・リブに参加していて好意的だったのは、井上輝子さんくらい。井上輝子さんは現在までそのままずっと続いて女性学に関与されています。今（前？）日本女性学会の代表幹事さんでしたね？他にも少しはいらっしゃると思います、もちろん。少しいらっしゃると思いますが、でも意外と人間的にはつながってないんですよ。

じゃあ、女性学はどうやってできたかっていうことなんですけれども、やっぱり大学に籍があった人たちが、自分たちの研究の中で運動に触発されつつ、「何かしなきゃ！」っていうふうに始めたことがきっかけなんですね。特に海外留学組とか、海外の動向に影響を受けた人が多い。これが私の見方です。特に、アメリカ帰りの方たちが（当時のアメリカでは、ブラック・スタディーズとかウイメンズ・スタディーズが大学の中に出来上がってきていました）、「なんで日本では何もないんだろう？日本でやってもいいじゃないの？」っていうふうに、主張した。なので参加者の層が違う。年齢層も違う。階層的にやや上の層、年齢的にも上の層というふうに、見ています。

当時４年制大学の女子比率は非常に低かったです。また女性で研究職についている人もほとんどいませんでした。けれど、まさにこの時期、大学や大学院に進学し、女性をとりまく様々な課題、問題を研究する必要性を認識するようになった女性が、女性の大学進学率の増大の成果として、生まれ始めていたんですね。その人たちが中心になって、女性学を創設し、学会を組織した。1978 年には、女性学４団体が全部できています。この時期、１～２年の間に揃って出ています。やっぱりこの時期だなあっていう感じなんです。

リブ運動と女性学創設期を比較すると、どちらもマスメディアには出ていない。リブ運動期のメッセージは、マス・メディアを媒介とはしていない。本の刊行はありますが、ほとんどは運動体が発行するパンフレット、つまりミニコミを媒体としていたんですね。私たちはみなそれを集会などで買ったんです。50 円とか 100 円とかで。（それが今資料になって、「わあー、新鮮！」とかっ言われてますが、もともとそうやって売られたものなんですね。私たちはそれを買って一所懸命それから情報を得ていたわけです。決して新聞屋さんから届くもんじゃなかった！集会に行かないとダメ！そういう感じだったんですね）。

では女性学創設期にはどうなったか？情報の伝え手は、だんだん大学の研究者たちになってくる。つまり、研究会の雑誌だとか、大学の紀要だとか、学会報告の要旨集のようなもの、あるいは単行本として学術の世界の中で動きだすようになります。でもこの時期、女性学の情報は、決して広く届いていたわけではない。媒体としては学問領域の雑誌という形で制度化されていましたが、決してマスメディアではない。ミニコミと言って良いような媒体でした。

なぜ女性学がこの時期生まれえたのかという理由ですが、一つは国連の動きがあったと思います。国際婦人年があった。それで多くの人々が、「ああ、これは世界で大事な問題として認識された重要な問題なんだ」っていうふうに、認識しえた。日本は外圧だと動く国ですからね。外で認められると、正当化されるんですね。

もう一つは、新左翼運動や学生運動などの社会運動の退潮があったと思います。70 年代の前半から半ばにかけて、保守化していく。学生はみんなそれこそ（古い話はおもしろいですね（笑））、長い髪を切って、就職試験に備えたんですね（笑）。当時はそれで就職できたんですからね。今の学生さんから言わせると、「許せない」と思うでしょう？大学時代好きなだけ学生運動やって、「革命だ」なんて騒いで散々暴れまわって、４年生になったら髪切って、すぐ就職試験受けて、だいたいみんな就職できた。「なんて甘いやつらだ！絶対に団塊なんかに俺たちの気持ちが分かる訳ない！」と思うでしょう？正しいよ

(笑)。わかるわけないよねえ、現在の就活の厳しさなんてねえ。

ほんとうに今は、厳しい状況ですが、当時はそうだった。そういうふうに、みんな「スクウェア」になった。私の先生は「スクウェア」という言葉を使って、その変化を表現してましたっけ。70年代の前半というのは、そういう大きな変動期でした。

今思えば、この保守化が、後にネオリベラリズムとか、80年代末の社会主義崩壊などの出来事に結びつくような、大きな社会変動の幕開けだったんですね。この時期、つまり、70年代から80年代最初にはもう、新自由主義、ネオ・リベラリズムの最初の動きがイギリスやアメリカで始まっているんです。当時、私自身も、ネオリベラリズムとか、マネタリズムとか、そういうことを、サッチャー政権やレーガン政権で社会福祉切り捨てがどんな風に起きたのかとか、そういう話を読んでいたんですね。でもその時は日本の話と結びつけることができなくて、何か別な国の話のように感じていました。日本では福祉が本格的に社会政策になり始めたばかりだったし、確かに第一次石油危機とその後の不況は大きかったけど、結構すぐ景気の回復に結びついて、そんなに深刻な経済危機にはならなかった。でも、今読んでみると、やっぱり当時の私がいかに現実を見る力がなかったか、反省させられてしまいます。社会変動っていうのは、一つの時代の流れの中に、いろいろな文脈が折り重なっていて、なんて言うかミルフィーユみたいな感じになられているんだなあっていうのを、今改めて感じますね。80年代が始まった頃もうすでに、今、我々を非常に苦しめているグローバリゼーションとネオ・リベラリズムの動きが、もう世界の中で始まりかけていたということで、その動きの方にアングロサクソン系の国々は、新自由主義の方向を強めていった。そこでいろんな問題が起きて、それが日本にも90年代初頭のバブル崩壊以降、押し寄せてきて、グローバリゼーションも強まり、今の我々の現実というのをつくっているわけです（話がまた逸れてしまいました)。

元に戻ると、保守化がもうこの時期に始まっていた。社会運動が退潮し始めた。クリアに。リブの活動家の人たちは、やっぱりどっちかっていうと、「反体制」っていう感じがあるんですよ、雰囲気として。他方、大学教員とかは、あんまり「反体制」的ではない（…そういう人もいるけど…)、どっちかというと社会のシステムに組み込まれている普通の人じゃないですか（笑)、給料ももらっているし…。つまり、リブよりも保守的ですよね。だからリブにコミットすることが難しかった人も、女性学になると、参加しやすいということがあるのではないか。

他方、社会運動が退潮すると、社会運動のスローガンは、何か「空念仏」のように感じられてくるわけです。いくら変革を主張しても誰も動かないから。そうなると、多くの人が、「ただスローガンを唱えているんじゃなくて、ちゃんと研究して、重要なファインディングスを見つけて、変革のための具体的な手法を考えようよ」みたいな着実かつ堅実な方向に魅力を感じるようになる。「その方が先が見える」という感じ。実際、他の社会運動をしていた人の中にも、大学に戻った人もいる。こういう雰囲気もあったと思います。大学でもう一度、問題をきちんと研究しようというような。そういう時代の雰囲気もあったと思います

女性学創設期については、少し悪口もレジュメには書いてありますので、とばすことにします（女性学をつくったけども、最初はなかなか方向性が見えず、いろいろな別々の研究の寄せ集め、ごった煮のようだったと。あっ、悪口言っちゃった！すみませんでした)。

この時期の女性学で評価したいのは、やはり「主婦研究」ですね。この時期の「主婦研究」はすごいと思います。今では『主婦の友』も廃刊になって、「主婦」という言葉の魅力がついに消えてしまいましたが（昨日そんな授業をしました)、「主婦」はもともとは、すばらしく夢のある言葉だったんだよね。

大正期に生まれ、戦後60年代に三大「主婦誌」が飛ぶように売れる時代を経て、そして女性運動の中で「主婦」という「女性のあり方」の問題性が気づかれて、女性学研究の主題になり、21世紀の初頭にはついに『主婦の友』という雑誌も消えていった。これホント、時代の流れをまさに示しているでしょう？いいでしょう、社会史として書いたら。長い歴史を追ってみていくと、なんか小さいこと気になんなくなるね（笑）（脱線…、すみません）。

本当に、この「主婦」という存在のあり方の中にもこそ、さまざまな女性問題が凝縮されているんです。まさに、「アンペイドワーク」とか「被扶養の立場」とか「年金権」とか「社会保障の問題」とか「健康保険の問題」とか、ありとあらゆることがここにあるんです。なので「主婦」という存在のあり方という問題は、現在もけっして解決していないわけです。たとえば、非正規労働っていうのは、主婦の被扶養の立場というものを前提としています。それをモデルにした非正規労働に、若い男女が入っちゃったので、今の貧困問題が起きてくるわけですね。社会保険が全然まともになっていない。もともと主婦の立場というのは、扶養されている立場ですから、年金も社会保険もいらなかった。夫の社会保険のかさの中に入っていればいいという考え方。だから、ある収入がある程度を超えると自分で社会保険を払うけど、限度内なら夫の家族の一員だから、そういう人には社会保険の適用を考える必要がないというような考え方で、つくられている。日本のパートタイム労働は、この「被扶養の主婦」というあり方を原型としている。低賃金なのもそれが原型だからです。なので非正規労働の待遇改善が全然されないまま、現在まで引き継がれてきた。それが若者にも広がったわけです。つまり「主婦」であればそんな悪い待遇でも「問題ない」（勿論実際には当人にとっては大問題なのですが）。一応被扶養の立場ってものがあるので、それだけで食べているわけじゃないから「問題ない」と考えられていた。でもその同じ待遇でも、被扶養の立場にない人にとっては、「食べられない」。とんでもない「残虐さ」になってしまう（すみません、また脱線）。

当時の主婦研究は、そういうような話、つまり被扶養の「生き方」である「主婦」って何なんだ？という研究をしているわけです。「主婦ってなんだ？」「主婦労働って何だ？」「なんで、既婚女性は『主婦』になるのか？」「なぜ既婚女性だと、『主婦』の仕事が主要な仕事になり、他の仕事をやっていても、『主婦』の仕事をしなかったり、手抜きしたりすることは許容されないのか？」「女性は結婚してしまうと、主婦の仕事がメインの仕事になる」ということは、A．オークレーという社会学者も言っていますね。「近代における女性の立場」の特徴はここにあると。近代において既婚女性は、歴史上初めて、「主婦という仕事」を「成人女性の主要な役割」として担うようになった。その結果他の仕事は（賃労働でも自営業でも）、二の次になる。つまり主婦の労働がなされた限りで行っていい労働になる。なので労働時間も長くはできない。だからパートタイマーみたいな、家族に迷惑をかけない範囲の働き方みたいなものが既婚女性向けに作られる。そして、「主婦でもできる範囲」で働いているんだから、「待遇を同じにしろなどという無理は言うな」ということで、低賃金になった。

実際には、現在の非正規労働は、短時間労働ではない。長時間、働かされてます。また「主婦業と両立」なんて働き方は減って、夜間とか、早朝とか、非常に厳しい時間帯の労働も増えている。働き方は、全然労働者個人の自由になったりしてはいない。

でも最初は、そもそもなぜ非正規労働が安かったのかといえば、「自分の都合に合わせて働く」のだから当然だというロジックだったんです。「あんたたちは子どもが帰ってくる夕方には家に帰りたいわけでしょう？ならば、そういう都合がいい働き方を望むのであれば時給が安くたってしようがない。正社員とまるで違うのだから。」ということです。結婚すると、「主婦」がメインの仕事になり、主婦業と

両立できるような仕事しかできない。だからそれを理由としてつくられたのがパートタイムなんですね。
ね、「主婦」って不思議でしょう？この「不思議さ」に焦点を当てた研究を初期女性学は行なっています。初期女性学において主婦に研究の焦点を当てる諸研究が行われたことは、私は高く評価できると思います。

第３番目の時期に入ります。84 年から 90 年。私は勝手に「フェミニズム理論導入期」と呼んでいます。80 年代の初め、フェミニズムという言葉を使った本が初めて出ます。80 年代までフェミニズムという言葉は日本ではありません。使われていません。60 年代は婦人問題といった。それからウーマン・リブ期には女性解放論とかウーマン・リブとかウィメンズリベレーションと言った。女性解放と言ったんです。
フェミニズムという言葉はヨーロッパ…、アメリカから来たのかな。「フェミニスト」という言葉はあったんです。フェミニストって、「女性に優しい男性」を指す言葉だった。昔、「私、フェミニストです…。」と、私が言ったら、嗤われた。「あなた、男性じゃなくて女性でしょ？」。昔の使い方はそうです。女性に優しい男性をフェミニストって言ったのであって、フェミニズムの実践家・思想家を呼ぶ言葉ではなかった。フェミニズムという言葉が女性解放論を意味するという使用法が定着するに従って、フェミニストっていうのが主義主張を持って運動したり書いたりする人をいうようになったんですね。
フェミニズムという言葉をそういう意味で使用して出された最初の頃の本の一つは、青木やよひさんたちの編集で『フェミニズムの宇宙』という本だったと思います。覚えていますか？「上野･青木論争」の青木やよひさんです。「女性原理」の是非をめぐって論争したんですよね？忘れちゃったかなあ？…。青木やよひさんは、「近代社会は男性原理が優越していて、女性原理が弱いから、だから性差別が起きるんだから、女性原理を復活しよう」って言って、上野千鶴子さんが「そうじゃない、女性と男性を分けて、女性が女性原理、男性が男性原理を担うというふうに二元論になっていて、家庭に回されているこのことが問題なのであって、女性原理を単に復活するだけでは、女性が女性原理を主張するだけでは全然社会は変わらんよ」という話をした。そういう論争が「女性原理論争（エコロジカル・フェミニズム論争）」です。
その出発点だった青木やよひさん、当時のフェミニズム理論の大理論家。最近、ＮＨＫＴＶで青木やよひさんを見ましたが、ベートーベン研究家として登場されてましたね。残念なことに、やはり当時活躍されていた宮迫千鶴さんは、最近亡くなられましたね。新聞で知ってびっくりしちゃいました。宮迫千鶴さんは美術家だったんですが、この頃やっぱり活躍したフェミニズム理論家です。都市的フェミニズムというのかなあ、なんて言うかなあ…。『ママハハ物語』とかですね、なかなか優れた人でした。
そういう方たちがいて、立役者が上野千鶴子さん。まずマルクス主義フェミニズムという言い方が出来た。いや、最初はエコロジカルフェミズムかな？とにかく「～～フェミニズム」（後に私は冠つきフェミニズムと呼ぶようになりました）というような言い方が出てくる。その中の一つが、マルクス主義フェミニズム。上野千鶴子さんが言い始める。
このマルクス主義フェミニズムという言葉ですが、私自身はこの言葉をとるかどうか、かなり悩みましたね。私は、エリ・ザレツキイの『資本主義・家族・個人的生活』っていう本を、例の竹信三恵子さんたちと一緒に大学時代につくったグループで翻訳して出版したんですが、それが 80 年ぐらいのことです。「グループ 7221」という名前で発行しました。その出版の時、マルクス主義フェミニズムっていう言葉をとるか、とらないか悩んだんですよ。当時の日本ではマルクス主義は全然人気ない。こんなね、

教条的なものって思われていた。マルクス主義フェミニズムって、ソ連派を指すようなイメージがあったんですね。ソ連的な教条主義的マルクス主義に基づくような女性解放論のイメージ。そこでは、女性問題の解決は社会問題の解決の後というのが原則。つまり、「社会主義革命が先にきて、資本主義が社会主義になって、共産主義社会になれば自然に女性問題も解決するから、それまで待て」という理論です。なので、「マルクス主義フェミニズム」という言葉を出すか出さないか悩んだ。エリ・ザレツキイそのものの論文は大変おもしろい理論だったんですね。つまりラディカル・フェミニズムの問題的を社会構造と関連させて分析するというような。つまりこれが、当時のアメリカで生まれた、マルクスを従来の教義に縛られずに自由に読むことから生まれた「マルクス主義フェミニズム」の流れだった。私たちはこの流れの文献の最初の頃の紹介者ということになりますが、上野さんはその流れに「マルクス主義フェミニズム」という言葉を出しつつその新しさも強調しつつ、それを日本に紹介し始めたわけです。

この時期あたりで初めて、さっき言ったように、フェミニズムっていう言葉に冠をつけて、「〜〜的フェミニズム」（マルクス主義フェミニズム、エコロジカルフェミニズム、ポストモダンフェミニズム、ポストコロニアルフェミニズムとか）、いろいろ名前をつけて呼ぶということがやっと定着したんですね。

なので「訳の分からん言葉が溢れた」ということで、整理する仕事が必要になり、私が引っ張り出されていくわけです。この整理で私は有名になったんだと思います。理論書をつくって、枠組みをつくって。社会学者は、こういうことが好きですから。いろいろと類型をつくって、これはこう、あれはこう、と説明をするのが上手いんですね、はい。自分で言うのもなんですけど（笑）。こういう社会学の、しかも学史なんてやっていますからね、上手ですよ、こういう話させたらね。すみません（笑）。

当時、マルクス主義フェミニズムが有名になったきっかけになった本は、上野千鶴子さんの『資本制と家事労働』です。覚えてますか？小さな小冊子でしたね。海鳴社というとこから出ましたね。だけどインパクトありましたね、あれ。読んでみんなすごく分かったような気になったと思います。「そうか！家事は労働か」って。「家事労働は労働力再生産労働なんだ、それを担っているから女性たちは働けなくなる」、「家事労働と市場労働との関連性」はこうなっていて…と、きれいに説明してくれたんですよね。もう上野さんのこの本は引っ張りだこになりました。ここで初めて、フェミニズム理論というものが、現実を説明する上で有効だというように評価されたわけです。

他方、マルクス主義フェミニズムが紹介されるようになると、かえってラディカル・フェミニズムが見直されてくる。マルフェミと一番対立していたのがラディカル・フェミニズムなのでね。ラディカル・フェミニズムは、運動から出発した理論で、最初はあまり理論的ではない。「家父長制」という曖昧な概念を中心とするような理論動向でした。それが次第に精神分析を利用した理論形成を行なっていくようになる。

ところが、この精神分析は日本ではなかなか広まらない。なかなか難物で、定着しないんです。フロイド派の精神分析はまだ分かるとして、その後、ラカン派の精神分析と結びつくと、もうお手上げというか、訳が分からない。フレンチ・フェミニズムが中心になります。そしてポストモダン・フェミニズムなどといわれるようになる。これは学者受けはするんですが、一般受けはしない。なので、ラディカル・フェミニズムとか、ポストモダンフェミニズムなんていう言葉は、あんまり流行らなかったですね。やっぱりマルフェミが一番大きかったかなあと思っています。

では何でこの時期こんなふうにいろいろなフェミニズム理論が出てきたか？私としては、こんなふうにまとめています。

女性学の最初の時期には、女性学は、性役割研究や性差別問題っていうものを随分明らかにした。し

かし、「それがどうしてできてきたの？」とか、「歴史的にどういうふうに変化したか」とか、「なぜ、それがそうなっているのか」とかですね、そういう大きな社会変動との関連性などについては、禁欲して言わない。性役割はこうですとか、家族内の役割はこうなってこう矛盾がある。そういう研究が初期女性学の頃、沢山出た。いろいろ実証研究をして、「主婦はこうである」と。でもそうなると皆知りたくなる。「それはどうして？」とか、「どうしたら超えられるの？」とか。その時求められたのが、マルフェミのような大きな枠組みの理論だったんじゃないだろうかと思っています。

つまり、マルフェミやその他のフェミニズム理論は、ジェンダー問題を、「近代化」とか「資本主義化」とか、ポストモダン風に言えば「人間中心主義化」とか、「科学技術」とか、要するに大きな意味での「近代を見直す」という営みの中に位置づけることを可能にしたのだと思います。その営みの中に、「女性問題・ジェンダー問題」と今言われているようなものを位置づけなおし、「性役割」などの問題を歴史的文脈の中でつかまえたいという気持ちが、恐らく 80 年代には強かった。それを通じて私たちは方向性をつかみたかったんだと思うんですね。

見方を変えれば、こうした理論は、フェミニズムを単に女性の問題を扱っている理論として位置づけるのではなく、従来の近代社会観を見直す役割をも果たしたのではないかと思います。「新しい歴史観」とか「社会変動観」を生み出す可能性を秘めたものとしてのフェミニズム。「女性学」は最初、基本的に女性の運動のための学問という性格を持っていた。でもそれはフェミニズム理論に結びつくことによって、歴史全体とか近代全体とか、つまり私たちの未来とか、そういうものをつかむ上でも何か役に立つんじゃないかというふうに感じられたのが、フェミニズム理論期だったんじゃないかなあと思っています。

この動きが次のジェンダー研究の成立期に行くのだと思います。この後、ジェンダー研究というのがやっと出てきます。91 年から 2000 年までというふうに位置づけています。その頃になると、女性問題への強い問題意識というのは徐々に、徐々に少なくなってきました。もうその頃には、「性別役割分業批判」だとか、「家事労働批判」だとか、「主婦」だとか、そういうことについてはかなり議論してきた。そして「男も女も仕事も家庭もやるんだ」とかですね、「性別役割分業そのものが問題」なんだとか、そのくらいのことは、研究者が言う必要もないくらい、多くの人に共有されるようになった。性別役割分業意識を世論調査でいつもチェックして「変わった、変わんない」とかいって評価する行政の動きなんかも、この頃にはもうできているんですね。

なので、なにかそういう「性役割」批判などの女性問題の問題関心と直接結びついた女性学じゃなくてですね、ちょっと違うものが求められた。例えば、女性の諸問題ではなくて、男性の諸問題も重要だよって主張した伊藤公雄さんは、この時期の代表選手だと思います。彼は、「90 年代は男性学の時代」だと言っています（そのわりには男性学研究者って今 20 ～ 30 人しかいないんだってね、日本でね。何でなんでしょうね。もっとやってください！ジェンダー研究で男性学は。ぜひやっていただきたいと思います。男性じゃなきゃできないこともあるし、女性もできることもありますが、男女問わず、ぜひやっていただけると嬉しいです）。男性学の研究者が生まれてきたのはこの時期のことです。

90 年代は男性学の時代。伊藤公雄さんの授業は、なんと 2000 人ぐらいが来てしまい、ものすごい人気だったそうです。2000 人とは凄まじい人数ですね。そんな人気があったのに、なんで今は 20 ～ 30 人かなあって、思っちゃうんですよね。私としては。今こそ男性学よ、頑張れと言いたいです（はい。すみません。ちょっと厭味っぽくなってしまいましたが…）。

セクシュアリティー研究も始まったのはこの時期ですね。フーコーが、かなり本格的に、ジェンダー研究の文脈で読まれるようになった。今はフーコーを読むのは、普通のことですが、最初は、ジェンダー研究とフーコーが相性があるかどうかということについては、異論も多かったんですよ。フーコーは、全然ジェンダー論を展開していませんのでね、それをどうやってつなぐかっていうので、かなり苦心があったんですね。今はかなり普通に使っていますけど、そのつなげ方というのは、それぞれの研究者の人がかなり苦しみながらやったと思います。セクシュアリティーの問題、また、フーコーの影響を受けた身体や医療、また人口問題とかですね。

社会政策学もこの時期ですね。大沢真理さんも、このあたりから活躍するようになりましたね。政治学的関心、医療福祉など、ジェンダーに関連する研究領域が次第に拡大していきました。問題関心も広がりました。「女性問題」に関心があって、「女性がどう生きるか」ということに関心があるという問題意識以外に、いろんな問題関心が生まれてきた。ジェンダー変数を使ってみると、いろいろ見え方が違うよ。こんなに見えるよというね、そういうような研究がふえてきたんです。

なので、自分はあまり女性問題には関心ないよっていう人も、ジェンダー研究に参加するようになりました。「女性問題」ではなく「男性問題」とか、「セクシャルマイノリティーの問題」に関心があるという場合は勿論として、そういう問題自体に関心がないが学問的関心からジェンダー研究をしているというような、いろんな問題の持ち方が出てきました。

他方、ポストモダン思想の影響から、かつての「解放の政治学」的な問題の立て方そのものへの異議申し立ても、生まれてきました。「女性の解放はこういう筋道であるべきだ」とか、「こうでなくてはいけない、そうじゃない人はだめだ」みたいな議論に対して、そういう言い方自体が抑圧であるという議論が、いろんな形で出てきました。

つまり、こういう言い方の中に既に、民族や人種や文化や階層による多様性をみない独善的な西欧白人中産階級的なものの見方があることが告発されたわけです。特にアメリカでは、エスニシティの問題やレイシズムの問題、クラスの問題とかが強くなる。そういうことでかつてのフェミニストたちの主張に対する批判というのが、かなり強くなってきた。これらのことが、フェミニズム理論からジェンダー研究に動いていくきっかけになっています。

つまり、女性学とかフェミニズムというと、「女性」ということを前面に出すことになる。するとどうしてもそこに、「そこで言われている女性って誰のこと？」という問が生まれてしまうわけです。良くこういう批判ありますよね。「女性は立ち上がらないと」なんて主張すると、「そこでいわれている女性ってどこにいる女性？」と問い返される。「中産階級の高学歴女性のことでしょう？」とか、「日本人女性のことでしょう？」等。つまり他の女性は別のことを考えているかもしれないのに、そのことを無視して簡単に「女性は」という言葉で主張できる人は、「マジョリティの立場をかさにきてマイノリティの立場を無視している」ことになる。こういう批判が強まって、次第に「女性の立場」ということを、簡単には言えなくなってくる。

この複雑な諸事情が複雑に関与して、ジェンダーという用語が非常に広く選好されるようになっていきました。「女性問題に焦点を当てて、女性の主張を前面に出す女性学」から、「ジェンダー変数に焦点を当ててジェンダーセンシティブにいろんな現象を追うジェンダー研究」の方に、大きくシフトしていきました。

この移行がいいのか悪いのかについては議論があったんです。例えば井上輝子先生なんかは、この移行を心配されていたんですね。「ジェンダー研究ということによって、女性のための学問という性格が

弱くなる」と。井上先生のように、「女性の為の、女性による女性の学問である女性学を、ジェンダー研究に変えるべきではない」と心配される方も多かった。私は、ジェンダー研究に移行して良いという立場でした。はい。女性学と比較して、ジェンダー研究は確かに運動的性格・実践的性格が薄い、どっちかといえば学問的性格が強い。でもそれも良いのではないかというのが、私の立場でした。皆さんもきっとそうだと思うんですが、ジェンダー研究の問題関心は非常に多様です。別に運動には関心がない人でも、自分の学問的関心たとえば人口変動の研究とか、そのためにはジェンダー変数を入れてこないとやっぱり見えないからジェンダー研究に関わるとか、家族史研究にとってはジェンダー変数は不可欠だとか、いろんなタイプの人がいる。そういう可能性を充分開く、そういう学問としてジェンダー研究があって良い。この意味で、ジェンダー研究はそれ以前の女性学が持っていた「社会運動という出自」から生まれた学問的性格を次第に脱ぎ捨てていきました。

これは、ノーマルサイエンス化というか、ジェンダー研究の「通常科学化」の過程の一つだったと私は思います。ジェンダー研究が学科編成やカリキュラム編成の中に制度的に入り込む為には、ある程度運動的性格を脱ぎ捨てることが必要になってくる。教員の主義主張を伝えられちゃあたまんないという学生の意見もあるし、大学の立場というものもありますから、「客観的な学問を教えてくれ」という。制度化すれば当然そういう姿勢を大学では要求されます。つまり学問的性格を強めることは、制度化される可能性と一致している。学科になったりカリキュラムの一部になったりする為に必要である。そういうことがあった。

この同じ時期、「日本ジェンダー学会」が創設されました。また放送大学で「ジェンダーの社会学」が開設されました(すみません、私個人的には２回関わりましたんで、つい言及してしまいました。(笑)。やっと今、降りました。今、伊藤公雄さんが今年から引き継いでいます。開設されたのは 90 年代の初めですよね。放送大学は 92 年ぐらいだと思いますね)。そういう意味でですね、この時期が、ジェンダー研究が広まっていく時期だといえると思います。

他方、この時期はまた、「フェミニズムの制度化」の時期という解釈も、できると思います。1990 年代初頭の日本社会というのは、社会主義崩壊によるグローバル経済の成立、それによる日本の国際競争力の低下（社会主義圏の安い労働力に「世界の工場」という位置を奪われていく時期)、少子高齢化など、従来の社会構造を変革せざるを得ないような諸問題が生まれてきた。なのでこの時期恐らく政府も、何とかしなくちゃという思いがあったんだと思いますね。1999 年の「男女共同参画社会基本法」に結実していくような、「雇用と社会のあり様」全体の変革の機運が、この時期、うまれてきます。その時ですね、行政の中にフェミニズムや女性学、ジェンダー研究に対する幅広い需要が生じたと私は読んでいます。

それで、大沢真理さんなんかが大活躍する。政府も何とか政策化したかったんです。向こう様側も。政策として成立させたかった。その時には、女性学より、ジェンダー研究みたいな方が使いやすいんですね。またそうした政策化という需要に応えられる研究者が求められました。その求めに応じた代表的研究者が大沢真理さんだと思います。フェミニズムの政策化。フェミクラートとか言うんですかね…。「フェミニズムのテクノクラート」です。ヨーロッパやアメリカ、その他では普通のことなんですが、おなじような受容がやっと日本でも生まれたというふうに言ってもいいのかもしれません。

実際に、この時期は、自治体の方々もよく勉強していました。フェミニズムについてもジェンダー研究についても実によく勉強していて、これを何とか政策の中に生かそうという風潮がとても強かった。また、同じ時期、95 年に、北京会議が開催された。そこにはですね、日本全国から 5000 人も、参加した。

各自治体が募集して、北京に行ったんです。自治体などの行政が、自ら地域の女性たちを引っ張って行ったという状況です。そこで行政が手に入れてきたのが、「ジェンダー」という概念でした。その頃、自治体の人たちは、「これからはジェンダーです」とみんな言っていました。私自身は1989年に『ジェンダーの社会学』（新曜社）を出していらい、ジェンダーという概念をずっと使っていましたから、ちょっとびっくりでしたね。北京会議で「ジェンダーの主流化」という言葉が表に出て、「先生、これ知っていますか？新しい言葉なんです。ジェンダーの主流化をしなきゃいけないんです。ジェンダー問題を政策提言の時の中心に持ってこなきゃいけないんですよ！」って言ってました、自治体の人が。その頃、本当にしっかり言ってたんですよ。後には、手のひら返すように、「ジェンダーという概念は性差を否定する危険思想の現れ」なんていい始めたりすることになったことを考えると、苦笑せざるを得ない（笑）。笑っちゃったりして。

ほんとに、この数十年の歴史を思い出していると、笑っちゃうでしょう？思い出して下さい。思い出すだけでも本当に楽しいです。

また同じ北京会議がきっかけになったのが、ドメスティックバイオレンスなど性暴力問題。セクハラもＤＶも、実は日本社会では、女性運動が主に主導して既に社会問題化されてきたのですが、広く社会問題化されるきっかけになったのはやはり北京会議でした。北京会議以降、こういう問題がちゃんと制度化され、法制化されるような機運も高まりました。法律学者もこういう法律を書くように動員されました。私の友人の紙谷雅子さんは、「ＤＶ法を書いた」と言っています。大沢さんは「男女共同参画社会基本法」を書いたって言っています。つまり、学者が法律を書き、政策化することに動員された。これが「フェミニズムの制度化」です。

「男女共同参画社会基本法」の前文には、少子高齢化が言及されている。つまり「フェミニズムの制度化」を実際に生み出した最重要要因は、少子化問題とか高齢社会化問題だったと思います。少子高齢化問題を女性運動側が主導して社会問題化したことはない（育児休業法とか介護の社会化要求とか、そういうことはあったと思いますよ）。それはむしろ行政が主導して社会問題化した。しかし、「フェミニズムの制度化」はそれにのった形になった。つまり結局「介護保険制度」とか「育児休業制度」とか「男女共同参画社会基本法」を生み出した政府側の懸念というのは、少子高齢化だったことは否定できない。

しかし何はともあれ、「ついに、日本も性別役割分業家族に基づいた社会システムじゃなくなるんだ、そこを変えるんだ！ほんとにやるんだ」と私も思っちゃいましたね。てっきりそう思いました。だって政府がそっちに行くんだって言うんだもん、人が良い私は信じちゃいますよね。「ああ、そうなんですかって。ほんとにやるんですか？って。介護保険もできた。ほんとだろうな。育児休業法もできた。ほんとなのかなあ？やるのねえ！」って。（笑）。「男女共同参画社会基本法で社会システムそのものがジェンダーバイアスないようにしなきゃいけない。年金だとか税制とかそういうのも全部変えます！」…ああ、本当に変えるんだ。やっとこの30年の思いが実現するんだと。

政府がこういう方向に舵を切った背景には、日本型企業社会の崩壊があった。それは誰の目にも明らかでした。男性も正社員になれない。男性稼ぎ手型家族が維持できない。ならば「共働きを基本にする家族」に変わってもらわにゃあならん。財界にとっても願ったりの方向だったはずです。

でも、「男性稼ぎ手型」をやめるだけじゃダメですよね。均等待遇をしたり、長時間労働をやめたり、ワークライフバランスをやったり、育児と仕事が両立できる体制をつくったりしないと、この転換はうまく行かない。なのに政府も財界もそういうことは全然やらなかったね。やらないで、「男性稼ぎ手型」だけやめて、「家族が壊れたのはフェミニズムのせいです」というふうに行っちゃった。これがバックラッ

シュの方に結びついていくわけですよね。

この「フェミニズムの制度化」に絡んで、「行政フェミニズム批判」が起きました。私も、批判されました。私自身はそんなに行政に関与していないんですけど、まあ、やってもいいかなって、どっちかと言うとそっちのタイプの人だったんで（わりといい加減な人なので、あんまり運動的な人じゃないので）。なので従来フェミニズム運動をやっていた人たちの中に、「フェミニズムの運動的側面が薄くなってきた」とか「行政フェミニズム」とか「官製フェミニズム」だとかという批判が起きてきました。バックラッシュの時、このあたりの論点が蒸し返されて「要するに、変に行政なんかにのったからバックラッシュでやられた」という主張も生まれました。「今思えば正しかったかもしれない」とも思いますが、正しい側面もあるし、でも、そうでないとも思う。社会制度は、制度決定過程に入り込まないといつまでも変わらないものですから、そのへんは難しい。権力に汚れないとばかり「いつも清く正しい立場」にいるわけにいかない。ちょっとは権力に手を染める人がいないと社会は変わらない！そういう意味ではですね、私は人の立場をあげつらうのって嫌いなんだよね。みんな仲良くやっていこうよみたいな人なので、運動は運動で一所懸命にやってもらって、行政の人は行政でやってもらって、学者は学者でやるからさっ、みんなはみんなでやろうよ！っていうね、それでいいと思っている人なので、あんまりこっちがいいって言いたくないんですね。

でもまあ「官製フェミニズム」といわれるような状況になったことで、社会運動はいらないという気分が若い世代に起きちゃったのは残念です。きっと若者にはちょっとそういう気持ちがあったんじゃないか。もうフェミニズムは国が主導的にやってくれるんだ。何も言わなくたって自動的に進むのかなあみたいな。「思った人、いない？」

当時の学生さん、結構そういう感じでした。「男女共同参画って、先生は重要だみたいなことを結構力説するけど、本当に力説する必要あるんですか？所詮ああいうのは国がやっていることだし、ほっといたって進む。でもだからと言って何か良くなるわけでもなし」みたいなことをよく言ってた、みんな（笑）。「お上のやっていることは信用できないし」とかね、よくそんな話をしていました。うん、私もわかんないではない。若い女性のフェミニズム離れがこの時期、大きく進んでいく。自分に関係ないよ、みたいな。なんか「フェミニストが正論を言っている」みたいな嫌われ方をするようになる。「フェミニズムは正論」、つまり「学校の先生が良く主張すること」「よくできる女子生徒・優等生の女性の主張」。そういう感じがしてきた時期ですね。「なんか正しいことばっかり言う」「正論は嫌いだ」と言われたこともあります。何となく強者の言葉みたいなふうになっている時期でした。ここがやられた。バックラッシュはまさにここを襲いました。私たちからすると、情宣不足、運動不足だった。「官製フェミニズム」という印象が強くなり、行政と結びつくことが多くなった。よく男性の学者たちからも言われましたよね。「お上と結びついてフェミニストは強者だ」とか、「現在ではフェミニズムは天下を取った」とか。「お前らの声は天の声だ」とか言われて、「だからもういばるな！」とか言われて、「少数派みたいな顔するな」とかと言われたこともある。外から見るとそう見えたんですよね。

しかし、政策の内側、つまり「フェミニズムの制度化」の内側にいた人から見えるものは随分ちがっていたようです。大沢さんなんかの話を聞いてみますと、バックラッシュは、最初からです。与党内部には、ずっとバックラッシュ勢力が強大な力を持っていて、「男女共同参画社会基本法」なんかは、そのバックラッシュ側の動きを上手くかいくぐる形で、何とか通した。だから直後から、「だまされた！」といきり立つバックラッシュ勢力によってバックラッシュが起きてくる。

この「官製フェミニズム」の「外から見た時の見え方」と「内側からの見え方」の違いは非常に大き

い。外から見ると「男女共同参画はちっとも揺らいでない」し、国のお墨付きがあるし、問題ないかのように見える。ところが、実際には、最初からとんでもない攻撃にさらされていたわけです。

最後の時期区分に入ります。1999年、石原慎太郎が東京都知事に就任しました。これが一つのきっかけになります。東京都を中心に…、これは昨年の若桑さんのテーマですので、読むだけにします。ジェンダー・フリー・バッシングの吹き荒れることになりました。最初は女性財団の発行したジェンダーチェック等が問題になる。このくらいの時はかわいいもの。私もちょっと教条的過ぎるかなあと思ったりもしたもんねえ。ジェンダーチェックとか言ってね。点数とかつけちゃってね、はい。ちょっとまずいかなあとか思うところもあったけど、でも「遊び」感覚で使えば良いんじゃない？くらいの軽い受けとめ方でした。つまりジェンダー・フリー・バッシングのめちゃめちゃなロジックを善意で解釈しすぎ、相手の側にも理があるかななんて思っていたわけです。いやー、しかし、そうじゃなかった。だんだんだんだんですね、次から次へ起きてくる。都議会でのジェンダー・フリー・バッシングの最初の質問なんか、結構読めるんだよ。土屋さんとかの質問も最初はそれほどひどくないんです。結構常識的なことを言っているんです。ところが、だんだんひどくなるんだよね、言動がね。

「何でこんな非常識的なことはまかり通るの？」って気づいたときには、もう遅かったっていう感じですね。「ジェンダー・フリー」あるいはさらには「ジェンダー」という言葉の使用そのものを、「過激なフェミニズム思想」（つまり男女の差を一切認めず中性化しようとするフェミニズム）の現れとして攻撃するような政治的言動が一部の政治家たち、あるいは社会活動家や知識人の中に現れました。直接的な担い手というのは「新しい歴史教科書をつくる会」とぴったり重なっています。その背後にはそこに書いたようなものがある。これらについては、基本的には若桑さんの論文を利用していています。

で、「新しい歴史教科書をつくる会」は1990年後半から勢力を強めて、女性運動や従軍慰安婦の問題を取り上げるとその主張を自虐史観として攻撃しました（この中でＮＨＫの国際戦犯法廷の番組が政治家の圧力によって改編されるという事件があり、運動側が原告となって裁判をやっていたのですが、最近敗訴という最高裁判決が出ちゃいましたね）。2000年頃から、日本会議の機関紙は夫婦別姓制度、男女平等政策、男女共同参画社会基本法など、男女平等に関連する法、制度、政策に対して反対する姿勢を強く打ち出しました。

この主張に正当性を与えるために（これは私の分析ですが）利用されたのが、「過激な性教育」という論理だったと思います。男女平等に反対するのは難しいけど、「過激な性教育」に反対するのは、一般人の受けがいいんですね。性教育の是非を考えるのか難しい。なんと言っても「性」の話題は難しい。なので、普通の人はなんか言われると戸惑う。「こんな性教育、いいと思いますか？」と聞かれれば、多くの人が「…わかんない…」って思う。これがうまく利用されたんですね。

ジェンダーという概念と、「フェミニズムの制度化」と、「過激な性教育」は、バッシング派の人によって、無理やりくっつけられた。実際には、担い手が全然違うでしょう。「ジェンダー研究をしている研究者」、「性教育の担い手」、「男女共同参画社会」や「夫婦別姓」などの政策の実現を求める運動の担い手は全然違う。なのに、なぜかくっつけられて、一緒くたに論じられて、「男女共同参画社会基本法」が「過激な性教育」をしているかのような主張になり、そうした一派に「ジェンダー・フリー派」という名前が貼られた。われわれから見ると、ジェンダーという非常に広範に使用されている中立的な概念と、特定の政治的立場と、性教育上の実践のあり方に対する評価が、関連性がないまま結びつけられていて、とんでもないデマゴギーだと思うのですが、「過激な性教育」という相手を貶める否定語を貼り付けて

男女平等勢力に攻撃を加えるために、一般の人にはなかなかわかりにくい「ジェンダー」という概念をかぶせて正当化したわけで、なかなか良くできている。確かに性を語ることに対しては、誰もが抑制しがちになる。「性を教えること」、「性を語ること」は、大変難しいことであって、羞恥心や困惑が生じやすい。一方男女平等や「女性の人権尊重」という主張は、誰も否定できない。なので、この勢力を否定するために、「ジェンダーフリー派は、『男女平等』や『女性の人権尊重』という主張を装って実は男も女も区別しない『過激な性教育』を行うことを主眼としている」という主張を行なう。その根拠として、「ジェンダー」という概念を使用していることを挙げる。つまりジェンダーとは「男と女には身体的差異はない」という主張を含む概念であり、「性差や性別を否定してする」ことだから－。

この主張、それなりに上手くできている。めちゃくちゃだけど、知らない人には通じる論理を持っている。上手だなあというふうに思います。

その最初の例が、国会議員の山谷えり子さん。後の安倍政権における内閣補佐官ですが、女性学習財団の小冊子、『未来を育てる基本のき』攻撃。また『思春期のためのラブ＆ボディＢＯＯＫ』への攻撃。このへんは皆さんもうご存じなので飛ばします。

この線に基づいて、本格的なジェンダー・フリー・バッシングが2003年から2004年にかけて行われて、ジェンダー研究までもが国会において攻撃の対象になりました。「ジェンダー研究」というのは過激なフェミニズムそのものであると。ジェンダーという名前で授業を行いながら、過激なフェミニズム教育というのを大学で行っているんだという主張を、山谷さんが国会でしています。この辺で皆さん初めて、「おお、危ない」と思い始めたのではないでしょうか。私たちも警戒の動きを始めたのはこの時期です。

2005年末に男女共同参画社会基本法行動計画の見直しというのがあったんです。これがある意味で政治的な山場だったんですね。これに向けてジェンダー・フリー・バッシング派というのは次から次へと弾を送り出すというか、仕事を始めます。

４月には「過激な性教育・ジェンダー・フリー教育を考えるプロジェクトチーム」が結成されて、「男女共同参画社会基本法こそフリーセックスを理想とする過激な性教育思想の源泉であり、原始共産制を是とするマルクス主義共産主義の思想なんだ」というふうに主張して、ジェンダーという概念そのものを使用禁止にしろという主張を行っていきます。

これらの動きに影響を受けたひとの中には、「ジェンダーって、先生、ほんとに危ないんですねえ」とかって、言ってくる人もいました。ほんとにね。あの私、学術会議というところで、ジェンダー概念が実際にはどんな風に使用されているのかというような報告書を出したんです。その時、ご一緒した先生が、全然普通の方でジェンダーなんて全然知らない方なんですが、「こんな報告書出しちゃって、本当に大丈夫なんですか先生？本当に大丈夫ですね！世間じゃあジェンダーって危ないって言っていますよ！いいんですね？」と、何度も念を押されるんですね。私は「大丈夫ですから先生。安心してください。大丈夫です。学術的な世界では、全然危なくない言葉としてちゃんと定着していますで、信じてください、信じてください」ってなだめて、名前を入ってもらって、学術会議で通しました。やりましたって感じで、いろんな方々にご協力いただいてですね、まとめ役の江原と言われておりまして（笑）。「大丈夫です、安心して大丈夫です。平気です」とか言ってね。だって、ほんとのことですものね。でも、どうも上手らしいんですよ、意見の違う人も上手く丸め込むのが…（笑）。

えっと、そういうふうなことが起きて、「ジェンダー概念は危険だ」という感じが一部に生まれ始めてしまった。これはジェンダー研究をやっている、あるいはここジェンダー・フォーラムにとっては大変残念なことですね。こんなことが一部にでも残ってしまったら、大学におけるジェンダー教育や、あ

るいはジェンダー学やジェンダー研究者の養成や、いろんなものにマイナスの影響が出る。どうしようという気分でした。

2005年12月に新たな行動計画が策定され、行動計画の中では、一応ジェンダーという概念は残りました。これに一所懸命努力して下さったのが猪口邦子さんです。小泉チルドレンの一人の猪口邦子さん。当時、少子化担当大臣、男女共同参画大臣で一所懸命努力して、全力を挙げて残すことに努力していただきました。ただ、社会的性別なんて、変な訳がついちゃったりね、いろんな説明がついちゃったりして、かえっておかしいという意見もあるんですけどね。でもご本人から伺うと、「あれがせいぜいだった」と仰っていますね。「あそこまでやるのがやっとだった」と。そのくらい激しいものだったというふうにおっしゃっています。

2006年には、あの安倍さんがついに総理大臣になっちゃった。私はドキドキしました。このままどうなっていくのかなって不安でいっぱいだったんですが、なんか総理大臣になるとかえって過激な発言を控えるようですね。その後、それほどひどくはならずに、昨年の9月に、安倍さんが誰も唖然とするような形で辞任しました。私、その時学生と合宿に行ってたんです。すると合宿の最中に、一人の学生が言うんですよ、「先生、安倍辞めましたよ」「うっそーーー！」（笑）「なんで辞めるの！？理由が通らないじゃん！理屈が通らない。」「辞めるならもっと前に辞めろ、これから辞めるな！」ってね。びっくりしましたね、みんなもね。「何なんだありゃ、」と思ったんですけど、あれで一応ですね、政治生命が終わっただろうと、勝手に思っていますがどうなるのやら。わかりません。

このバックラッシュの間、私たちはなかなか有効な反論の組織化ができませんでした。勿論、「ちゃんと反論してました」という方もいっぱいいらっしゃると思います。でも多くの研究者は「唖然として無視した」。つまり反論ができなかった理由の一つは、ジェンダー研究が「学問研究に志向する」人の集まりになっていたんですね。政治的関心を持たない研究者も多くなっていた。また、ポストモダン思想や社会構築主義の影響というのもあると思いますね。「それらが悪い」と言っているんじゃないですよ。私もかなりそういうのやるの好きですから、社会構築主義とか好きな方ですから。

ただ、理論が繊細でしょう？安倍さんたちの言っているような「ジェンダー・フリー・バッシング」とまじめに張り合う気なんかしないでしょう？ああいうめちゃめちゃな主張には、反論する気力自体なくなりますよね。Ｊ．バトラーのような理論を読んで、とてつもなく精密で難しい哲学的議論をしている人が、バックラッシュ派のめちゃめちゃな議論を相手にすることはできない。する前に笑っちゃいますよね、ケケケケとね。つい笑っちゃうんですよ。笑っちゃいけないの、本来は。でもそういう学者からするとどうしても苦笑してしまうんです。学者からすると、こういう議論ができるということ自体「現実と思えない」。「こんなことを言う人がいるとは信じられなくて」、反論しなくなっちゃうんですよ。

私はレジュメに、「あまりにも乱暴なＧＦＢの政治的言動を自らへの攻撃と認識し、その相手をすることは、研究者のプライドが許さない」と書いちゃいました。実際結構そういう人いるんですねえ。「ほんとに先生、あいつらの議論をまじめに取り上げて議論するんですか、まともに取るんですか？」とか言われました。「まじめに取りあげること自体、研究者のプライドがゆるしません！」って。私は、「その時その結果我々が倒されちゃったらどうするの、ちゃんと闘ってよ」と言いましたが、そんなふうに思っている人も、多かったんじゃないですか。

他方、政策決定に参加した人々というのは、なかなか反論できないんですよ。自分のやったことは、言っちゃいけないという大原則がありまして、やったことについてはね。なので、口を封じることを要求されるんですね。なのでこの方々は動きにくい。

つまり、だんだんジェンダー研究が学問的色彩を強めた結果、一般の市民にはあんまり関心がなくなった。「ジェンダー」という概念がどうなろうが、「ジェンダー研究」がどうなろうが、それがどんなふうな、妥当だろうが妥当でなかろうがどっちでもいいやっていう気分があったと思います。「関心ないよ、それより大変なこといっぱいある」。そうです。そのとおりです。もっと大変なこといっぱいあったからね。

また細かく見ていくとバックラッシュ派の主張は、実際に、事実に基づかないんですね、彼らのやってんのは。あんまり事実に基づかないと、かえって誰が誰に対してどういう攻撃をすればいいか全然わかんなくなる。あまりにも事実無根だからね。そのあたりのことは、それは関東社会学会の年報に書きましたんで、読んでください。あそこまで事実無根なものに上手く反論していくっていうのは、逆にとても難しい。反論してもかみ合わないんです。相手がね。なので、なかなかうまくいかなかった。

そういう意味で、なかなか反論が学者のほうから出てこない。ただ、そのことによってですね、学校の先生たちからかなり言われたのですが、「学会がちゃんとやってくれないと困る」と。「ジェンダーって概念がそんな危険なことじゃないとか、ジェンダー・フリー教育はそういうことじゃないっていうことをちゃんと言っていってくれないと、自分たちが攻撃されてしまうんです。教育の中でジェンダーに関連する実践を行なっていった先生たちが、非常に大きな攻撃を受けているんです。学者にとってはどっちでもいいでしょう。学問の自由で守られているから、でもそれって無責任すぎるんじゃないですか」って言われました。「実践家は守られてない。だから学者の責任において、ジェンダーという概念はこうですよって出さなきゃだめだ！」と言われました。それが結構言われた。なので反省して、その後思い立って、（批判されると私はきちんと反省するので）ちゃんとやんなきゃなと思って、幾つか動きをした理由なんです。

実際、私はこの批判は本当だと思いますね。学者は学者の責任において、ジェンダー概念はどんな概念か、ジェンダー研究って何かっていうことを、社会に発信していかないと、それを使って実践してきた人たちがみんな批判されてしまう。学者は学問の自由で守られているが、実践家は違う。そのとおりですよ。そこの部分をちゃんと見なきゃいけない。「プライドが許さない」という人には時々言っています。「プライドが許さないかもしれないけど、やんなきゃダメだよ」って、言っています。

それで、しかし、学問の方ではですね、先ほど言いましたように学問の自由もありまして、着々と世間の動きとは関係なくジェンダーについての学問の組織化というものが行われまして、「ジェンダー史学会」、「ジェンダー法学会」がこの時期組織化されてます。その他ですね、科学研究費に「ジェンダー」という項目ができたりですね、学術会議から幾つかの報告書がたくさん出たり、ジェンダー学分科会というのも学術会議にでき上がったりしてまして、それなりに制度化、要するに通常学問―ノーマルサイエンス化の方向にあるわけです。なので社会や政治の動きと学問の動きが非常にちぐはぐで全く逆に向いているような印象が、2000年代にありましたね。学問こっちでいっているのに、なんで政治はこっちなんだろうっていう、なんかわけわかんないなみたいな、分裂していくような気分がありました。

結論。

「ジェンダー研究」は、ジェンダー・フリー・バッシングによって非常に大きな痛手を負ったと、私は思います。学生の分野選択において、女性学やジェンダー研究を選択することに対する躊躇を生み出したと思います。大学カリキュラムにおける女性学、ジェンダー研究関連科目の廃止や縮小を生み出したと思います。実際、そうした意見をいくつか聞いています。「学科の名前にはジェンダーをいれない

ほうがいいよ」とか、「授業名からジェンダーという言葉は消しなさい」とか、「ジェンダー・フリーという言葉は使うな」とか、そういうふうに言われた研究者の方がいます。あるいは、ある大学で聞いた話では、新設にあたって「本当はジェンダー研究という名前にしたいんだけれども、それはやっぱり今、危ないでしょう。だから『女性のキャリア研究』にしたいと思っているんですよ」というのもあったようです。

そういうふうに「ジェンダー」という言葉を使わない方がいいという雰囲気は未だに、非常に強い。また、「女性学・ジェンダー研究」関連出版物の減少も起きていると思いませんか？かなり起きていると思いますよ。出版社は上手です。やっぱり売れるものを売りますね。無論そうじゃない、良い出版社も知っています…、すみません（笑）。いろいろな方がここにいらっしゃっていますので、ほめとかないと（笑）。あの、大変いい本屋さんもいっぱいありますが、売れるものを売るところも多いんです。すみません（笑）。

それからですね、普通の女性たちにとっての受けも本当に良くない。「普通」って誰のことかということですが、私が勝手に「普通」だと思う人のことを言っちゃっているだけです。なので皆さんの中のかなりの方は、「私は当てはまんないよ！」と思われるかもしれません。私の知っている、教えている学生さんたちの多くは、「フェミニズムという言葉が嫌いだ！」って言いますし、「フェミニストは威張っている！」って言いますし、「ジェンダーなんて言葉は危険だよー」って言うし、「そんな研究しちゃったら普通の女の子になれないよぉ！」とかって言っています。はい。

でも、彼女たちもね、そう言っていながら、男女平等は当たり前だと思っているんですよ。その人たちは。不思議ねえ。男女平等まで否定する学生に会ったことないです。それからですね、「仕事と家庭の両立なんか朝飯前だ」って！いうんです。やれて当たり前なんだって！

なので私は彼女に聞いてみました。「じゃあ、なんでフェミニスト嫌いなの？」と。そうしたら、「やれて当然のことをやってるだけなのに、それを威張っているかのように言うから」とかって言っていました。「あなた、認識甘いよ！簡単じゃないんだよ、やってみ」とか言って、１年かけていろいろ文献を読んだ。そうしたら全然簡単じゃないということがよくわかって、「先生、人生観変りました。180度変りました」とか言っています。ご安心ください。

彼女の言い方を聞いて、やっと「専業主婦も大事です！」って強く主張する人の解釈の仕方が分かったように思いました。そういう言い方を聞くと、私は凄く不思議で、だって「専業主婦という生き方」を否定したことなんか一度もないので、何で否定されているように思うのかなと。つまりこういうことなんですね。私たちが「仕事と家庭の両立」とか「ライフワークバランス」とか主張するのは、条件が全く整ってなくて、その条件を整えるために主張しているんですね。でも、もう条件は十分だという前提で聞くと、「仕事と家庭の両立なんか朝飯前」、「誰だって出来る、普通のこと」。だからもう何も言わなくて良いはずなのに、いつまでも「両立ライフの重要性」とか主張しているのは、「専業主婦は良くない」と他人の生活に干渉したいから、そして「両立ライフを取る女性が偉い」ということを主張したいから、というように聞こえるわけですね。つまり、フェミニズム嫌いとかいいながら、実際にはあまり話が合わない人は少ない。そうなんですよ。話すとわかりますよ。「男女平等いりません！」とか、「私はずっと男についていきます。三つ指ついて」とかっていう女性はあんまりいない。

なので彼女たちとうまくコミュニケーションをとっていくために必要なのは、単に知識なのではないかと思います。彼女たちはあまり現実を知らない。働き方がどうなっているのか、両立ライフが簡単なのか、あるいは「男女平等や男性の家事・育児分担に対して強固に反対するグループが日本の伝統文化

を守れという掛け声の元で、ジェンダー・フリー・バッシング言動をくり返している」という事実。それが、「日本の政治の中心勢力の一部に確実にいる」という事実。それを知らないでいる。私たちだって知らなかったのですから。

バックラッシュは今後もまだ続く可能性があります。政治勢力というのは常に合従連衡ですから、彼らが勢力を伸ばせば、また動きだします。常に起きます。今後も起きるでしょう。これをどうやって我々が対処していくかっていうことは、やっぱり今から考えておいた方がいいです。ちょっとピークが終わったらもう終わりだろうと思うのは、甘いと思います。

でも、私たちはいたずらに悲観的になるべきではありません。社会の中にどこにも自分の代弁者を見いだすことができず、手書きのパンフレットから始めて40年。いろいろな私、そこに私をつなぎ合わせて「私たち」を考えるとすれば、リブからここまで「私たち」は来たわけです。もし本当にこの全ての過程を経験した人が、思い返すとするならば、「私はめざましく成功したんだなあ」と感慨にふけるに決まっています。つまりたとえ敵という役回りにせよ、日本政治の中核に入り込んだんですよ！すっごいじゃないですか！「目の敵」にしてくれたんですよ！総理大臣が！すっごいじゃないですか！総理大臣ともあろう人が目の敵にしてくれて、私たちを最大の敵の一つ、敵の一つだね、そんなに大きくなかったね（笑）。一つぐらいには見てくれたんだ。いやあ、大したもんだあ！（笑）そこまでいったか！目にも入ってなかったでしょう？40年前には。ねっ！そこまでやってきた。

これは、たしかに成功です。たとえ、私たちが夢見る成功とはかけ離れた無残な成功にせよ、成功は成功だ！（笑）。こんなもんだよ、きっと！ジェンダー研究の成功なんて。そんな甘い話があるわけないでしょう。だって、こんなに大事な大変な問題なんだもの。これからやらなきゃいけないこと、ものすごく多いのですから。

最後、「これから」にいきますね。「これまで」はこうだった。では「これから」私たちは何をしなきゃいけないか？日本社会は戦後最大ともいうべき社会変動に直面しています。これはたしかです。その中で、男女共同参画のイメージも非常に大きく変わらざるを得ないというか、すでにもう出してあるんですが、その出してあるものが、具体的に男女共同参画のイメージとして上手く人々に伝わっていない。

さっきちょっと言いましたけども、雇用の問題とか非正規労働の問題は凄まじい状態になっています。非正規労働の制度は、もともとは、ジェンダー問題を原型としている。つまり日本型雇用慣行は、ジェンダー構造を内包しており、雇用における性差別とは、この「男性が稼ぎ手、女性は被扶養」というジェンダー構造を基盤としていた。既婚女性において、その構造が明確になる。つまり主婦のパートタイム労働は、このジェンダー構造に基礎をおいていた。なので賃金がまるで違った。

パートタイム労働の低賃金については、あるいは再就職を求める既婚女性がパート労働者としてしか雇用されないことに関しては、不平等だという批判が多くあり、裁判闘争もなされてきた。その度、女性たちが闘い、勝ったりもしてきたんですが、なかなか変わらない。女性たちはずっと、この非正規労働という問題と闘ってきたわけです。現在のような状況になるずっと以前から。でもパートタイム労働の賃金差別をなくことはできなかった。今、非正規労働者は男性と女性でどっちが多いか知っていますか？知ってますよね、まさか。女性は全労働者の６割が非正規労働になっているんです。男性は２割弱です。実際には、グローバル化による非正規化という「雇用の変容」は、女性の方により重いより酷い状況をもたらした。

そもそも派遣労働法ができたのは、雇用機会均等法の成立と同じ頃です。雇用機会均等法ができると、

男女の差別が難しくなる。だとすると、これまで女性向け仕事としていた「補助的な仕事」に女性社員を留めておくことが難しくなるんではないか。女性社員としてとってしまうと、ずっと辞めなくなるんじゃないかという不安感があり、これまでの女性社員に代わって、派遣労働者で代替しようとしたという意図があったと思います。派遣労働法は、女性をまず対象にしていた。登録派遣という働き方はそういうものなんですよ。それが原型で、その後経済危機の中で、そこに男性たちも入ってきた。1999年に派遣労働は「原則解禁」となり、一定の職種以外はどこでも導入できるようになり、一気に広がっていきました。そして派遣労働者がどんどん増えていった。

その結果、非正規労働に就いている男女がそれだけでは生活できない、家賃が払えないということで問題になる。先進国はどこも、生活費の中で家賃の占める割合は大体６割を超えるくらい高い。非正規労働だとそうなっちゃいます。そうすると、家賃が払えないということで、その人たちがいろんな形での路上というか、ストリートに溢れだすという問題が生じてきます。それがネットカフェ難民とか、ホームレス化とか言われている問題ですね。

ではなぜ、非正規労働者が主に既婚女性の時には生じなかったかというと、既婚女性だったから、家はあったし、夫の「被扶養者」なんで生活できたからです。でも、既婚女性じゃなければ、女性でも男性でも、一人で働いていれば、住居費が必要になる。パートのお金で借りられる部屋っていうのは、非常に少ない。生活が厳しくなる。

この問題を、ジェンダー構造の中にきちんと位置づけ、雇用と家族の再生産と社会福祉・社会保険の問題を、そこにおける「安全・安心」と「公平さ」という問題を、根底から考え直す。それが「男女共同参画社会の形成」という問題なんです。つまり、ワークライフバランスを実現する、「仕事と育児の両立」を可能にする。それから「正規と非正規の均等待遇」を行う、「長時間労働を是正」する。これらのものを実現するような、雇用のあり方と結びついた男女共同参画のイメージをつくんなきゃいけない。

ではやはり「両立ライフだけが女性の生き方なのか」という批判もあるかもしれない。私の考えでは、「個人の生き方」としては、「専業主婦」という生きかたは当然当たり前ですが、「個人の自由」だと思うんですね。でも実は「専業主婦」という問題は、「女性の生きかた」の問題に収まっているわけではない。むしろ、正社員男性の給料カーブの問題なんですね。「専業主婦」を守れという主張は、むしろ「妻が働かなくてすむような給料を男に寄こせ」という主張でもあるわけなんです。そうすると、どうしても既婚パート女性とか、若い派遣労働者の賃金が安くなる。ここが問題の本質なんですね。つまり、「専業主婦として生きる」のは勿論自由なんだけど…、「そうできるだけの給料を中高年の男性労働者に寄こせ」という主張まで正当化されるかどうか。「私がじゅうぶん家庭でのんびりできるだけの給料を夫に寄こせ」っていう正当性を、もし主張するならば、それは正社員と非正規社員の格差を正当化する為の一つの論点になる可能性があるわけです。

つまりそういう問題をじっくり議論しながら、「男女共同参画社会」のイメージというものをですね、「平等な社会」「セーフティネットのある社会」のイメージで、人々に伝えなおさなければいけないと思っています。もっとクリアに出すように努力しなきゃいけないというふうに思っています。それが、一つの大きな課題。これ、ほんとにやらなきゃいけません。私たちはそれができる位置にいる。ジェンダー研究をやる人しかできないですよ、こういう社会イメージを作ることは。つまり、家族の再生産やアンペイドワークやワークライフバランスや、それから正規と非正規や、そういう問題と全体の社会保障とかそういうものがどう結びついて、どのような形で関連しながら社会の再生産を回しているかっていうことを、全体に見る見方ですから、ジェンダー視点というのはね。そういう見方はジェンダー研究から

しか生まれてこない。特に社会政策や社会科学系の先生たちには、ぜひ、そういう課題に取り組んでいただきたいと思います。

もう一つ私が大事だと思っているテーマがあります。それはグローバル化という問題です。グローバル化に伴って、格差社会が進行し、これまでの国民国家を単位とする社会統合に亀裂が走り、社会心理的に非常に大きな動揺が生じています。これは確かです。不安心理が社会中を駆けめぐっています。人々が「所属不安」におびえている。「所属不安」が、さまざまなナショナリスティックな行動や、あるいはネオコンの人たちの「共同体をつくれ」とか、「家族を守れ」とかですね、そういうスローガンを受容する社会心理を生み出しているんですね。

ネオリベラリズムというのはですね、市場経済に関しては、自由化・規制緩和を主張するくせに、市場以外の領域では、家族や共同体の維持を強く主張するんですね。つまり、国家などの公的なアクターは、福祉や医療や教育から手を引く、それらをチキンとやるのは家族や共同体の責任である、もし今貧困や子どもの非行や犯罪などの社会問題があるならば、それは本来家族や共同体が役割をきちんと果たしていないからだと、責任をそっちに転嫁するための主張なんですね。市場原理主義で雇用を柔軟化し生活の安定も解体しちゃったけど、その結果夫婦が生活できなくなって離婚したり、子どもがいろいろ問題を起こしたりしても、それは家族や共同体の責任、つまりは自己責任でしっかり生きる主体を作るのが、家族や共同体の責任なのだから、そっちが悪い。つまり「家族の価値」「共同体」「愛国心」を否定するようなフェミニズムやリベラリズムのせいだと主張するわけです。私から言わせればとんでもない責任転嫁だと思うのですが、ある人々にとっては、こうした主張は、とても受けがいいんです。なぜ受けがいいかというと、「拠り所」を与えてくれるような気がするからだと思うのです。

「ジェンダー研究」に集まっている人々の多くは、「自由が好き」なんですよね。なので、ある時期までは、多くの人の主張はネオリベ的な言動と重なっていたように思います。規制や伝統や既得権益を破壊し、自由競争に移行する。そのほうが気持ちが良い。男性だからとか女性だからということではなく、仕事の能力や達成度で給料を決める。そのほうがとても気持ちが良いなど。ところが、実際のネオリベラリズムは、市場以外の場の既存の秩序を堅持するんですね。このことが分かっていなかったところが、上手く利用されたなあと。

つまりネオリベは、男性ジェンダーを強調した振る舞いや言動を行なうことで、「流動化」によって「所属不安」に陥っていた男性たちに、幻想的に、「日本国家」だとか「家族」だとかを背負っていた頃の男性性アイデンティティを供給したんですね。私は石原も小泉もとても上手だったと思う。政治的パフォーマンスが。男性たちの「不面目感」「絶望感」「劣等感」「不安感」を上手に利用したと思う。「日本は負けた！」みたいなメッセージを送り、日本男性の唯一の自尊心のよりどころだった「経済大国」アイデンティティに対する不安感を煽りたて、「駄目になって良いのか」と煽る。そうなると男性たちは、「頑張る！」としか言いようがなくなる。男の人ってその辺が弱いんだよね。それを私たちは見切れなかったような気がしています。つまり、「日本国家が負けちゃわないように頑張らないと、女と子供が逃げてくぞ！」と。つまり「愛国心」とか「家族の価値」とかをエネルギー源として男性たちに供給し、国家や家族の価値を破壊する外国人やフェミニストに対する憎悪を煽り立てることで、所属不安におびえる人々に、「我々」感覚を作りだすことに、ある程度成功したわけです。

今度、『現代の理論』に書いたんですけど、R，コンネルは、「世界中でグローバル化に伴って、伝統的ジェンダー秩序を復活しようという動きが強まっている」と書いていますね。それは日本でも起きたと思います。バックラッシュって、そういう大衆心理を一部利用していると思う。なぜならグローバル

化は、私たちを不安にしていくからです。そういう問題にまず使用されるのが、ジェンダーを含んだシンボル装置。だから男性学などの「ジェンダー研究」は、こうした戦略を上手く分析する必要がある。彼らのパフォーマンス分析みたいなものを行なって、何が人々のこころにうまくフィットしているのかを見なきゃいけない。これは大きな課題だと思います。

さらにいうと、じゃあ、我々の「ジェンダー研究」は、どんなふうに人々の不安感に対して対応していくのか、人々の不安心理に訴えるようなメッセージを発することができるのか？という問題もあります。

別にそんなものいらないという人もいるかもしれませんが、私は、今は、戦後最大とも言っていいような大変革期だと思っています。これは世界的な動きの中で起きていることなので、日本だけではない。決して日本の景気がどうなんて、そういう問題ではありません。我々は結構大きな課題…、100年にいっぺんぐらいの大きな課題を背負うことになった。なので、なんか防衛的に自分の専門に閉じこもってしまうべき時期でも、バッシングを嘆くばかりでもいられない。やっぱり100年後を見据えて生きなきゃだめだと思います、今の時代は。

そういうジェンダー研究を我々はやる時期に来ている。それを行っていくことが、ジェンダー・フリー・バッシングというものに対応する上でも、最も正統な、最もまともな方向だというふうに思っています。以上。

―拍手―

近藤：どうも先生、ありがとうございました。

ちょっと、そこに居ていただいて、予定の時間に一応なってしまったんですけれども、この際、ぜひ江原先生にこれだけは聞いてみたいということがございましたら、あんまり多くの方からはちょっと時間的に難しいと思うので、限らせていただきたいと思うんですが、どなたか。できるだけ手短にお願いします。

質問者Ａ：お話、ありがとうございました。

ジェンダーのものの見方、考え方の対局にあるのは、世間というものがあると私は考えます。例えば、学者には学者の世間があり、政治家には政治家の世間がありますよね。地域には地域の世間。要するに、それぞれ一人一人が自分が属している、鍵かっこ付きの企業でもなんでもいいんですけれど、制度を下支えしているのは自分自身でもあるわけでもありますから、最終的には、自分自身の制度を下支えしている自分自身のエゴイズムとの対決を見ない限りは、変わらないと思うんですけれど、いかがでしょうか。

江原：恐らく、そうだな。10年前ならそうですねって賛成しましたね。今は、ちょっと…ちょっと引きますね。というのは、制度の下支えがなくなったと思っている人が非常に多くて、そこに不安心理が生じているんですよね。だから、ちょっと難しい。

下支えがある時に、「私はそうなんだ、自分がそこから利益を受けているんだ」と反省するというのは、ある意味支えられているからできる。でももう底が抜けて、いつ落ちるかわからない人に、「あなたは利益を受けてたんですよ…」と言って通用するか。きっと「それはそうかもしれないけど、じゃあ今、もう利益なくなっちゃったから、どうしてくれるんだ？」って言われると思う。男性も女性も。とすると、ある意味、相対化したり、自分自身を反省したりするという部分で語っていくことっていうのも、もち

ろん未だに有効なところがあるんですよ。もちろん事実はそうなんです。我々下支えしているんですが、ただ、そういうふうに言われて、じゃあ、「あなたは下支えしている自分というのをちゃんと見据えなさいよ」って言われたときに、「どうせ俺はそういう存在だよな…」というふうに、立ち去っていく。「ここでも俺はやっぱり受け入れられないよな…」とか、「私、そこまで強くなれないわ…」とかね。なっちゃう人が多いような気がするんです。その辺の部分が私は、やっぱりちゃんと見えなきゃいけないというふうに思っている話なんです。

すみません。何か抽象的な言い方になっているんですけどね、かなりの人たちが、自分はもう、制度的な下支えがない奈落を見たというふうに感じているような時代。団塊の世代でもう退職の人ぐらいですよ、そういうのを感じていないのは。

そういう人はそれこそね、勝っちゃった！って。終わりまで行っちゃったって。あとはもう年金だぁ！って、年金がなかったらどうしようぐらいは思っていますけど、30代、40代ぐらいの人々はどうなるかわからないっていう不安感がかなりあり、例えば大学が続くかとかね、「この大学続いてくれんだろうか」とか、「生徒が少なくなって潰れたらどうしよう」とか、そういう話、相談いっぱい来ます。それはすごく安定した職についているはずの大学教員の卒業生からです。

こういう人がそうなんだから、ましてや非正規労働についている人や、あるいは、もっと不安定な、一般の正社員でも小さい会社に勤めている人なんかは、もっともっとそういう話を聞きます。私たちは非正規労働っていう問題にどう立ち向かうかっていうことを考えなきゃいけないんですね。

女性たちは非正規労働っていうものを随分経験してきてますが、ある方が、私につくづく言っていましたけども、「今、女性問題をやりたくない。ずっとやってきたけど」どうして？と聞いたら、「職が今年、なくたった」っていうんですよ。３年経つと派遣の労働者っていうのは正社員にしなきゃいけないっていうことがあるので、だから切るって言われたって。公務員パートなんですね。「切るから来年からさようならです」って言われて、職、なくなったって。女性を一番苦しめているのは非正規労働ですよ。そこをなんとかしないと、どうにもならないでしょうって言われたんですね。

そこのところを…、まあ男性たちと共有できると思うんです。一緒に考えなきゃいけないポイントだと思うんですが…、もう一回元に戻ります。

だから、ジェンダーの問題を表に出さない方がいいんですっていう考え方もあるんです。正規、非正規を男女一緒にクリアしちゃって…、戦略的にね、正規労働者みんなに、ある程度安定した職を確保して、それまで性別の話は言わない方がいいかな、っていう戦略もないわけではないんですが、ここはジェンダー研究の場なんで一所懸命お話したように、日本の非正規労働っていうのは非常にジェンダーと結びついて成立できたものなんです。なので、下手をすると、この非正規労働の改革から女性だけまた、抜かされる可能性があるんですよ。

結構若い人たちに、男性たちに話すと、「やはり日本型企業雇用慣行いいよなあ。もどろう！」とかって言ってますよね。「戻した方がいい！成果主義なんてやめろ！年功序列だ！長期雇用だ！」って言っています。

でも、さっき言ったように女性はもう50パーセント、60パーセントが非正規なんですよ。日本型雇用慣行をやったってね、その中じゃ全然救われない。なので、そこをやるには、もう一回「ジェンダーの視点」はやっぱり抜かせないんじゃないかと思っているんですね。

ごめんなさい。話が違っちゃってね。そういう人々が多くなっているっていうあたりの問題と一緒に、今、おっしゃって問題提起されたことと、両方上手くできるような、なんか問題提起をしたいですね。

ねえ、そう思いません！（笑）すみません。

近藤：はい。あと、もう一人ぐらい、いかがでしょう。
質問者Ｂ：すみません。私は法学部出身でジェンダーにはあまり詳しくないのですが、ジェンダー・フリー・バッシングに関してちょっと疑問に思っているのが、私が高校生の時代に、結構リストラの嵐というかそういう時代を経験しましたので、同じ世代の女性たちと話していて、たとえ専業主婦になったとしても、夫がいつリストラされて生活に困るかどうかわからない。だからこそ、女性もちゃんと仕事を持たなければという意識を持っている女性が非常に多くなっていると思います。
　そういう女性たちからすると、ジェンダー・フリー・バッシング派の伝統的な日本の男女性別役割分担だとかそういうものは、男性の正規雇用が確保されない今となっては、もう言ってても仕方がないだろと…
江原：そのとおりです。
質問者Ｂ：はい。という感覚になっていて、正直、ジェンダーっていう言葉を意識していない働く女性たちの方が、ジェンダーという言葉ではないけれども、仕事と家庭の両立をどうしようとか、結婚と出産をどうしようとか、そういう疑問を身近に感じていると思います。
　私自身としては、ジェンダーという言葉を表に出さなくても、そういう働く女性たちの支援という形で、ジェンダーをもっと世の中に広めていくことはできるんじゃないかなと思っていますが。
江原：そう思います。全くご意見に違和感ありません。変なんですよ！ねじれているんです！政策的には、今度、「現代の理論」って書いたんですが、政策的には、ジェンダー・フリーっていうか、ちゃんと男女平等、「ジェンダーイクォリティー」の世界をつくらないと、社会が回っていかないようになっているんですね。そういう状況にもかかわらず、政策の一部の人々が、それにむしろ、反対するような主張を行っていて、結構与党の政策はそれに動かされるんです。影響を受けてまともに転換をしないわけですね。
　なぜなのか？やっぱり男らしさアイデンティティーが揺らいでいるのかなあとか、結構、男性からするとですね、「こんな危機の時に何が男女平等だ！家で家事なんてやってられっか！」っていう気持ちがあるんですよね。ジェンダー・フリー・バッシングじゃないけど、「女よ、引っ込んでろ！こんな危機の時に女はでしゃばるな」っていう感じ…？でしょう？だから、最近のジェンダー・フリー・バッシング派に女はほとんどいないんですよ。男が多いんですよ。女性も少しはいるけどね…。普通の人々でジェンダー・フリー・バッシングについてくる人って、そんなに女性の姿は見ないですよ。少ない。集会に行くと女性の数うんと少ない。男性が多いんです。ジェンダー研究派の集会には、結構女性の人いっぱいくるわけです、「普通」の人もね。
　でも他方において、女性は強い男性政治家にひきつけられるということは非常にある。「石原を支持したのは中高年おばさんでしょう？」(笑)。「小泉純一郎もやはり中高年の女性に人気あったでしょう？」女性の方がずっとそういうふうにね、保守政治家を支持している。男性政治学者に、「なぜ女性がああいう政治家に惹かれるのかを分析するべきだ、保守化しているのは女性だ」と言われて怒られちゃったんですけど。そうかなあと思ったんですけど（笑）。
　じゃあ、どうしてそうなるのかというと、やっぱり女性の方にも強い男性に対するあこがれがあるんですよ。危機になると「強い男性」を好きになるね。私は引っ込んで、男性に「頑張れ、頑張れ！もっとやって！」って頼む。それが危機から逃れることだと思っている人々がいるんですね。この人たちの

気持ちとぴったり一致すると、やっぱ石原が勝つかな（笑）。

だから、女性に対する視線も、厳しくする必要がある。危機になると女は裏に逃げて「男に頑張れ」という。「男たちの不面目感」を利用して、「もっと働け、もっと頑張って日本経済や日本国家やうちの家計を建て直さないと、もう逃げちゃうから」と脅している女性がいる。そうした女性に脅されているような気持ちになっている男性も多いんですね。女からそういうふうに突きつけられている日本の男は経済的にまともにならないと、女は逃げていくと思っている。現実、逃げています。（笑）

女性からすればある意味当然ということになる。だって、経済的なものが結婚の最も大きな理由になっているのが、性別分業社会ではないですか。なので、男性も一所懸命働いたりする。過労死なんか生じたりする。だから見方によっては、女性の方も、かなりずるい。学生たちも時々、「先生、女性ってずるい」という。そうだと思います。よくわかっています（笑）。「恐いもんなんだよ、女はね。」（すみません。性差別発言でした。）

―（笑）―

江原：つまり、そういう女性もいる。無論男性の中にも変なのいるし、女性の中にも恐い人、いっぱいいます。でも、そういう厳しい目で見た方がいいと最近思っています。すみません。司会者が「もうやめろ」て言ってます。

―（笑）―

近藤：ごめんなさい。

江原：すみませんでした。（笑）

近藤：時間の関係もありますので、一応これで、講演の方は終わりにしたいと思います。改めて先生に拍手を。

―拍手―

近藤：閉会の言葉っていうわけではないんですけれども、初代のジェンダーフォーラムの所長を務められて、現在は独立大学院の21世紀社会デザイン研究所の特任教員をしておられる庄司洋子先生に一言、お言葉を。

庄司：みなさま、今日はこんなに多数お集まり下さいまして、本当にありがとうございました。また、江原先生も、本当にいいお話をありがとうございました。改めましてお礼を申し上げます。

あの、もうところどころにですね、非常にパンチが効いて、目を覚まさせられると言いますか、私どもはこの10年間、ジェンダーフォーラムというささやかな組織の活動を通じて、それなりに頑張ってきているわけですけれども、特にですね、今の何と言いますか、無残な成功化っていうのは、私たちの課題っていうのをいろんな角度から考えなければいけないんだということが非常によくわかって、大変いいお話を伺ったと思っております。

先生にお礼を申し上げるとともに、皆さまに多数お集まりくださいまして、本当にありがとうございました。今日は長い時間、ありがとうございました。お礼を申し上げます。

―拍手―

近藤：皆さんのお手元にアンケート用紙が配られていると思いますので、できましたら率直なご意見を

お書きになって、お帰りの時に係の者に渡していただければと思います。

また、今後、フォーラムのいろいろな案内等を希望される方は、アドレスをお教えいただければ、いろんな催し物その他についてご案内を差し上げたいと思いますので、よろしくお願いします。

それじゃあ、これで今日の公開講演会を閉じたいと思います。本当にどうもご苦労さまでした。

―拍手―